

明君・池田光政の防衛構想 「備前東部籠城戦略―士農一体」

平成二十四年二月十一日

杉 嘉 夫

〒703―8281

岡山市中区東山二一四一十

杉 嘉 夫

☎086―273―8505

はじめに

二〇〇九年は、備前藩主池田光政公の生誕からちょうど四百年でした。岡山城西の丸（元内山下小学校所在）で生まれ、同地で亡くなられた公は、江戸時代三百年三百藩を通じて明君ナンバーワンとも言われる方です。その所以の一つは、藩校・閑谷学校・百二十三箇所の手習所を開くなど教育に熱心なことでした。これらの開講は、他藩に百年も二百年も先駆けるものでした。

また一方強い正義感と堅い意志を備えられた光政公は、**治に居て乱を忘れず**、有事の策を常に練り、平素から着々と準備をしてこられた方でした。本書は光政公が有事対処の一環として秘密裏に準備していたと思われる防衛構想＝「備前東部籠城戦略―土農一体」について拙論をまとめたものです。この構想については、光政公が岡山城から東北方約四十里^{約40km}の山中になぜ和意谷墓所を設けたかを考えていて推論したものです。

光政公の防衛構想について書き残されたものは一切有りませんが、最後までお読みいただければご納得いただけるものと信じております。なお最後の「おわりに」から読んでいただくのも面白いかと思っております。

...

目 次

はじめに

序 章

第一節 光政の鹿狩……………七

光政の狩猟回数の変化／倉安川完成後の鹿狩／鹿狩の主眼／一六八〇年の鹿狩の意義

第二節 土農一体化のための施策……………一三

「総て国の大事二つ有り」／兵農分離と土農一体／領民の心を一つに／仁政主義／教育による感化／宗教改革／武士の地方配置／在の鉄砲打ち／土農一体は古いか

第三節 予めお断りしておくこと……………二三

「それは何に書かれているか」／「平和な江戸時代に防衛準備が必要であったか」／「なぜ今そのような説が出てきたのか」

第一章 光政・蕃山の防衛構想

第一節 池田光政と熊沢蕃山……………二七

池田家の略史／「明君・池田光政」／当時の東アジア情勢／当時の隣国—播州赤穂の情勢／蕃山の三千石取立て／熊沢蕃山の評判／蕃山の戦略思想／北狄侵攻に対する防備策

第二節 備前東部籠城戦略とは……………四〇

光政と蕃山の防衛構想／朝廷との関係—尊王意識／岡山城籠城策の否定／備前東部地区とは／備前東部地区の戦略的特性／比べるべき戦史例

第三節 備前東部籠城戦略を証明するもの……………四九

備前東部籠城戦略を窺わせるもの／家老知行所の配置／大多府島の秘匿／大ヶ池の改修／蕃山の知行地／蕃山の備前退去

第二章 備前東部籠城戦略の本格準備

第一節 籠城準備の本格着手……………六一

千姫の卒去がきっかけ／光政の神経性下痢／光政と幕閣との関係

第二節 和意谷墓所……………六五

和意谷墓所の立地に関する謎／巨大な墓石の運搬／表向きの報告と本当の狙い／「七のお山」の戦術的意義／和意谷墓所に関する異説

第三節 閑谷学校……………七〇

閑谷の戦略的位置／閑谷学校の軍事的側面／氾濫作戦の準備＝二本荒手の池／閑谷学校を行在所と

する計画／「軍事施設論は世界遺産指定運動に迷惑」か

第四節 井田（せいでん）……………七六

井田の法／井田の造成／下井田の造成／井田の真の狙いは埠頭建設／井田に関する後世の解釈／山田方谷の観察／幕末の長州広島両藩の片上湾仮泊

第五節 倉安川……………八六

倉安川とは／倉安川の戦略的意義／倉安川は半年で出来たか／吉井水門から広谷村までの新用水／吉井水門の評価／松崎村から旭川までの水路工事／平井一網ノ浜間の延伸と旭川との水位差解消策／なぜ十年以上もかかったか／なぜ着工の報告を遅らせたか

終 章

第一節 秘密裏に準備された諸準備……………九九

儒教精神の具現と公称／表向きは治水策・利水策とした／幕府への報告を加減した／蕃山の監視と光政の致仕

第二節 綱政の防衛構想の転換と永忠の遺志継承……………一〇二

一 綱政の防衛構想の転換

二 光政の遺志を継いだ永忠

下井田の造成／閑谷学校の堅固化／奴久谷村の経営

おわりに……………一〇七

光政は将軍に対し純忠の大名であったか／光政は取り潰しに対して必死の抵抗を準備していた／真実は那邊に・ご自身で考えていただくために

序 章

第一節 光政の鹿狩

① 光政の狩猟回数の変化

下のグラフは光政の在国間の年間狩猟回数である。池田光政は、一六七二年に致仕（隠居）して藩主を綱政に譲ったが、それまでは一年ごとの江戸在府と岡山在国が規則的に繰返され、致仕後もたびたび江戸に行っている。このグラフを見ると倉安川が完成するまでは在国間に鹿狩を行わなかった年も多く、行った年も一回か二回であったが、倉安川運河が完成した翌年一六八〇年には七回も鹿狩を行っている。

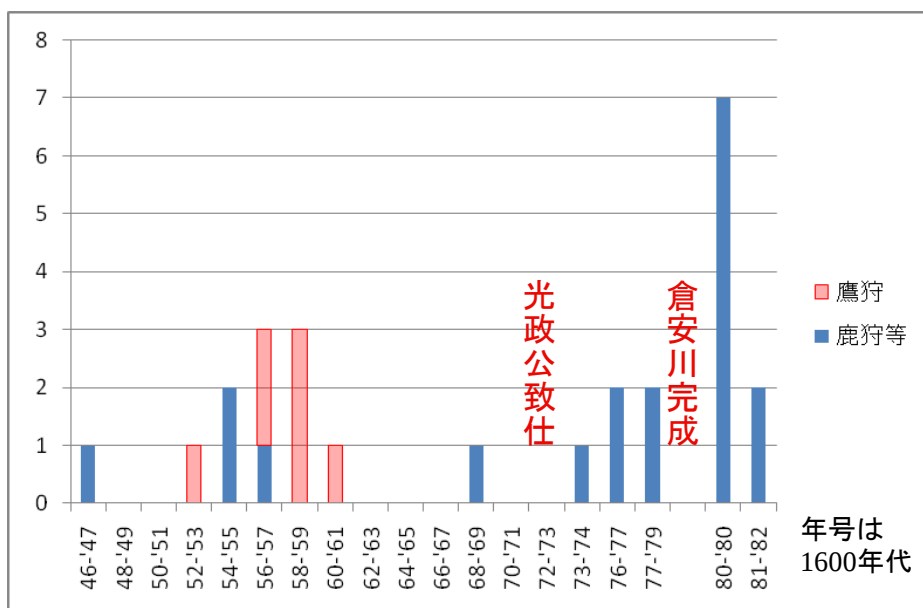
② 倉安川完成後の鹿狩

下の図は、倉安川運河完成から光政卒去までの間の九回の鹿狩の概要を地図上に展開したものである。一六八〇年一月二十七日岡山の牟佐で参加人員一万九千人、内農民が一万八千人、士が千百人であった。なお農民というのは池田家履歴略記に「在の責子（勢子のこと）」と書かれているものである。次いで二月十八日金川で三千三百人、うち農民三千二百人、士は八十三人であった。

次に二月二十九日鹿久居島で五千三百人、うち農民四千五百人、士八百三十四人。こ

のときには三反帆の船二百五十六艘を使っている。翌二月三十日光政と綱政は途中閑谷聖堂に参詣して和意谷に移動した。三月一日光政らは和意谷墓所へ参ったのち狩にかかった。このときは一万九百人、内農民九千九百人、士九百二十五人であった。翌日、光政の一行及び綱政の一行は和意谷を發って約四十里先の岡山城に帰った。このとき和気村から舟に乗って吉井川を下り、吉井村の水門から倉安川運河に入っている。総延長約二十里の倉安川の通過要領については、それぞれの舟に綱を引く農民を五人ずつ配置し、その農民が舟を引いて運河の土手を走ったと池田家履歴略記に書かれている。ここで七十二歳の光政の連日の長距離移動と狩猟の繰返しの疲労を大幅に軽減したのが舟の利用、特に倉安川の活用であったことに注目したい。

光政公在国間の狩猟回数



その次の狩は、同年十一月十四日半田山に七千人を集めて行った。このときは農民三千百人、士千七百人と町民二千人が参加している。町民というのは岡山の工人、商人のことである。このとき「惣町よりも責子出ければ火警のため伊賀の者間断なく市中を廻る」と池田家履歴略記に書かれている。そして光政は十二月四日岡山を発って江戸に向かったが、そのついでに熊山一大ヶ池で狩を行い、その日は片上に泊り、翌日井田の北側の春日山で狩をしている。この二回については参加人員の記録は残っていない。そこで一六八〇年の牟佐から半田山までの五回の鹿狩の参加人員の累計を求めると、農民が三万八千人、町民が二千人、士が四千六百人であった。ここで注目すべきは士の八倍強の農民が集められていたことである。

翌一六八一年十月には岡山の瓶井（みかい）山＝今の操山で狐狩を行った。翌一六八二年三月和気村の北方五ヶの天神山で狩を行っている。ここは佐伯陣屋の土倉淡路が吉井川沿いに南下する敵を抑える要点である。このときも光政は吉井川と倉安川運河を通して岡山城へ帰った。この二か月後の五月二十二日光政は岡山城西の丸で七十四年の生涯を閉じている。

倉安川完成後の鹿狩

池田家履歴略記による



③ 鹿狩の主眼

この光政の大規模な狩については以前江戸表でも評判になり、閣老から光政に「少し遠慮されては」と言われたことがあった。多数の農民を動員し、鉄砲を並べる岡山藩の狩を閣老は物騒な行為と見ていたようだ。（一六五五年の半田山の狩には足守藩主の木下淡路守と庭瀬藩主の戸川土佐守が来観している）

閣老の忠告に対して光政は、「夏目長右衛門、三方ヶ原に死せずんばいずくんぞ徳川氏の今日あらんや」と答えたそうである。これは一五七三年徳川家康の軍と武田信玄の軍が浜松城の北の三方ヶ原で対戦して徳川軍が大敗し、家康も突撃して討死したいと逸ったところ、夏目長右衛門が押し止めて殿は早く浜松城に帰って再起を図って欲しいと言い、殿（しんがり）を勤めた長右衛門はそこで討死したという故事を光政が引き、鹿狩という訓練も徳川を思えばこそであると反論したわけである。これを伝え聞いた三代將軍家光は、「新太郎（光政の通称）、智者の一言士気を振起するに足る」と称賛したということである。しかし家光は一六五一年に卒去しており、この閣老と光政の言葉の応酬はごく初期の狩の際のものと思われる。

以上要するに、光政の行った大規模な鹿狩は軍事訓練そのものであったということである。

④ 一六八〇年の鹿狩の意義

一六八〇年の鹿狩の反復もまた軍事訓練そのものであったが、これを観察すると次の三点が浮き上がってくる。

第一は、有事に農民及び町民の動員を企図する光政にとって、鹿狩は大規模な**動員**訓練であった。

第二は、大規模な機動（戦略上の移動）訓練であった。離島防衛を想定したと考えられる鹿久居島の鹿狩には三反帆の船を二百五十六艘集めている。このとき光政、綱政らの一行八百三十人は、岡山から寒河村まで陸と海約四十里、鹿久居島から和意谷まで海と陸約二十里、和意谷から岡山まで陸約四十里をそれぞれ一日で動いているが、一行の多くは徒（かち）であり、楽なものではなかった。その際前年に完成した倉安川運河の有用性を全員が体感したはずである。

第三は、年間七回のうちの四回の鹿狩が**備前東部地区**で行われたことである。この四回の鹿狩が行われた日生諸島で最大にして隣国播磨に接する鹿久居島、池田輝政らの墓所のある和意谷敦土（あづち）山、山陽道上の要点の熊山一大ヶ池、片上湾岸の要地「井田（せいでん）」一春日山の四地区ともに、私がこれから提示する「池田光政の防衛構想『**備前東部籠城戦略**』」の要点中の要点である。その細部については第一章及び第二章で詳述する。



第二節 士農一体化のための施策

① 「総て国の大事二つ有り」

一六六一年二月の光政の日記（「池田光政日記」）に「惣て国の大事二つ有り、一つは軍陣、一つは祭にて候故、これほど大きな事は無之候」と書かれ、続いて「然れども凶年のため国の大事の一つである祭を質素に執行する。また家中もいよいよ万事儉約に努めること」と書かれており、この間に入るべき「軍陣については手を抜けないが」の文節は省略されている。この一文から、光政は国を預かるものの大事な務めとして有事の備えと平時のまつりごとを挙げ、かつ有事の備えについては如何なる事情があってもおろそかにすべきではないと考えていたことが分かる。明君の明君たる所以である。これに引きかえわが国の戦後の為政者の有事に対する関心の低さは寒心に堪えない。

しかしこれは政治家だけの話ではない。歴史学者についても言えることで、池田光政の研究にあたりこの「軍陣第一」＝有事対処施策の視点からの考察が欠如している。この「軍陣第一」という鍵を以てすれば、今まで光政にまつわる謎とされてきたことの多くを解くことができる。以下この「軍陣第一」を鍵として光政の防衛戦略について考えてみたい。なおここで予めお断りしておくことは、光政の言う「軍陣」とは藩領を如何に防衛するかということで、「侵略」とは全く別のものである。いつの時代でも国の防衛は大事なことであり、かつ国民の心が一つにならなければ成し遂げられないものであるということが本論の基調である。

② 兵農分離と士農一体

一六四九年（慶安二年）、幕府は將軍家の直臣に日常的に確保すべき兵員を軍役（やく）規定で以て示した。たとえば禄高一万石で二百三十五人というように。各外様大名などもそれに準じた規定で以て幕府の動員命令に即応できる態勢を整えた。（三十一万五千石の岡山藩の場合には七千人程度の動員か）ここまでは兵農分離の範囲内である。

しかしこの兵員は幕府の動員命令に応じる際のものであり、藩独自で敵の侵攻から領国を守らねばならないときには、領民を最大限動員して士農工商一体となって戦わなければならないことは自明であり、光政など心ある藩主の胸には幕命に即応する軍役の整備計画とともに、「士農一体」の動員計画があったはずである。池田光政公伝によれば、一六七一年の「御人数分」に書かれている御先手・御旗本の総人数は、「緩」のとき二万四五七八人である。これは士の約二倍の農（工商）の動員を前提にしている。しかしこの農（工商）の動員の具体的な計画は幕府の意に反する面もあり、書き残されたものはない。わが国の近世史においては、士と農（工商を含む）の関係について「兵農未分化」から「兵農分離」に進み、それが幕末の「農兵隊の出現」まで続いている。兵農分離の裏にあった「士農一体」は、今後とも歴史学に登場することはないであろう。

③領民の心を一つに

しかし「土農一体」の動員といっても、ただの数合わせだけでは戦力にならない。領民の心を一つにまとめられなければ、農工商に戦場という厳しい環境に耐えさせ、死地に身を投じさせることはできない。

そのため光政は大きく分けて四つの施策を講じてきた。

第一は「仁政」を施して、安民（農民の安定・維持）を図ること。

第二は「教育」を行って、藩主に忠実な理想的な四民を育てること。

第三は、淫祠淘汰、寺院淘汰を主体とする「宗教改革」。

第四は「武士の地方（じかた）配置」、すなわち武士を村々に配置して農民との良好な関係を平素から築いておくことである。

④仁政主義

光政は「国を堅くし軍を治るには、その国の地民をよくするにしくはなし」として愛民・安民に努めた「仁君」であった。

一六五四年、備前は未曾有の大洪水で國中飢饉状態になったが、光政は「一人も飢え人これ無きように」と城にある米と銀子を皆國中へ配るとともに、義母の千姫を介して幕府から四万両借銀して各郡に渡した。このとき熊沢蕃山が光政を助けて被災者の救援に奔走したと伝えられている。

また一六四八年、光政はそれまで農民に課されていた柿渋、溝役、麻がらなど七種目の課役（過役）を免除している。また家臣に農民の撫育・救恤（じゅつ）を怠って農民が艱難に陥れば再生産が不可能になると教示している。

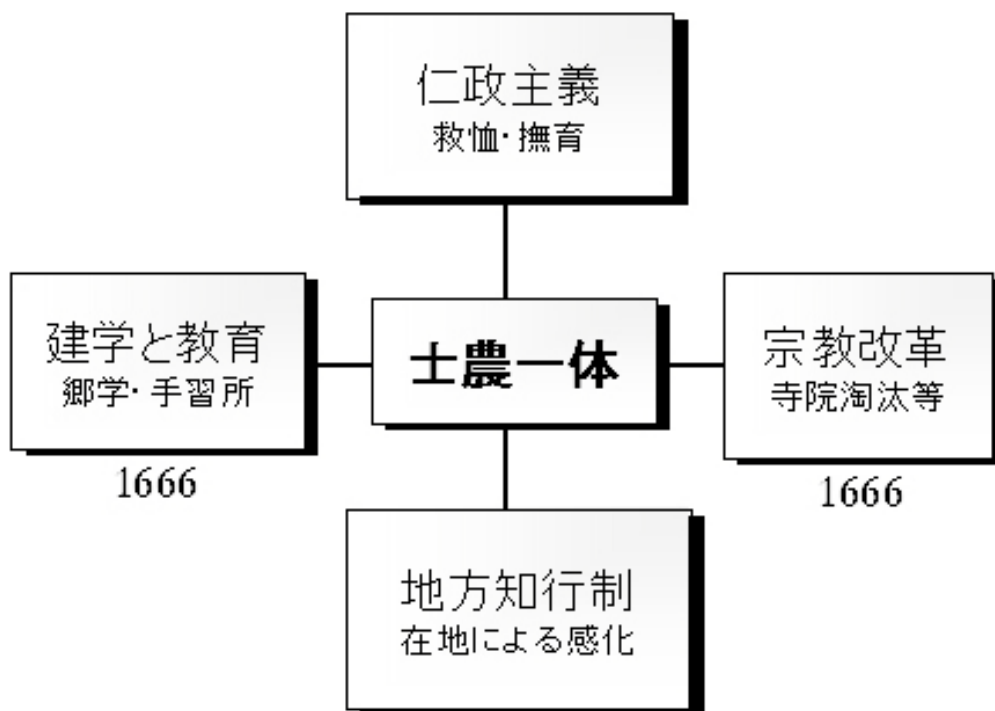
⑤教育による感化

光政は他藩に先駆けて武士のために藩校を作り、また庶民のために閑谷学校と百二十三箇所の郡中手習所を設置した。

この郡中手習所の設置の目的については、津田永忠が一六七三年の手習所巡視の際の演説の中で次のように述べている。「人に生まれては親へは孝を尽し、国法に背かず、一類和睦し、上を重んじ奉行代官庄屋な

どの申しつけを用い、家職の耕作に精出すべきことを合点させることにある」と。これを要約すれば、藩主に忠実な理想的な農民を育てることが手習所の目的であった。また永忠は、手習所は子供の教育の場であるだけでなく、成人教育の場でもあるとも書き残している。

これらのことから手習所も閑谷学校も有事に役に立つ領民を育てる場であった。



⑥ 宗教改革

一六六六年五月十八日、光政は領内の産土（うぶすな）神と由緒ある神社数百を残して、淫祠一万五二七社を破却させ、一代官所に一社当て作らせた七十一社の寄宮にそれぞれの御神体を集めさせた。

次に同年八月三日、キリシタンの神道請を断行した。これに対してキリシタンの寺請制度を推進していた幕府は、不満と疑惑を持っていたようだ。

そして同年同月、光政は僧侶を慳貪（けんどん）邪見と見、寺院の淘汰に乗り出した。その中心は幕府の不受不施派の禁制政策を受けての同派の弾圧であった。それは不受不施派の三百十三カ寺の破棄、僧侶五百八十五人の還俗で、これに真言・天台・禅・一向・浄土の寺院の破棄・僧侶の還俗を加えると合計五百六十三カ寺の淘汰（藩内寺院の五十四%）、八百四十七人の還俗（藩内僧侶の四十三%）であった。

これらは、有事光政が四民に動員を呼びかけても、各宗派の本山がそれに反対した場合、寺院・僧侶の感化を受けている領民は動かない。またそのようなとき本山の指令で一揆を起こさないと限らない。特にそのような場合不受不施派の領民が藩主に従うとは到底思えない。そのような事態が起こらないようにというのが寺院淘汰の主眼である。

なお光政の不受不施派に対する弾圧とそれに対する信徒の抵抗は相当激しかったようで、それが三百五十年経った現在も岡山における光政の評判を落としている。

⑦ 武士の地方配置

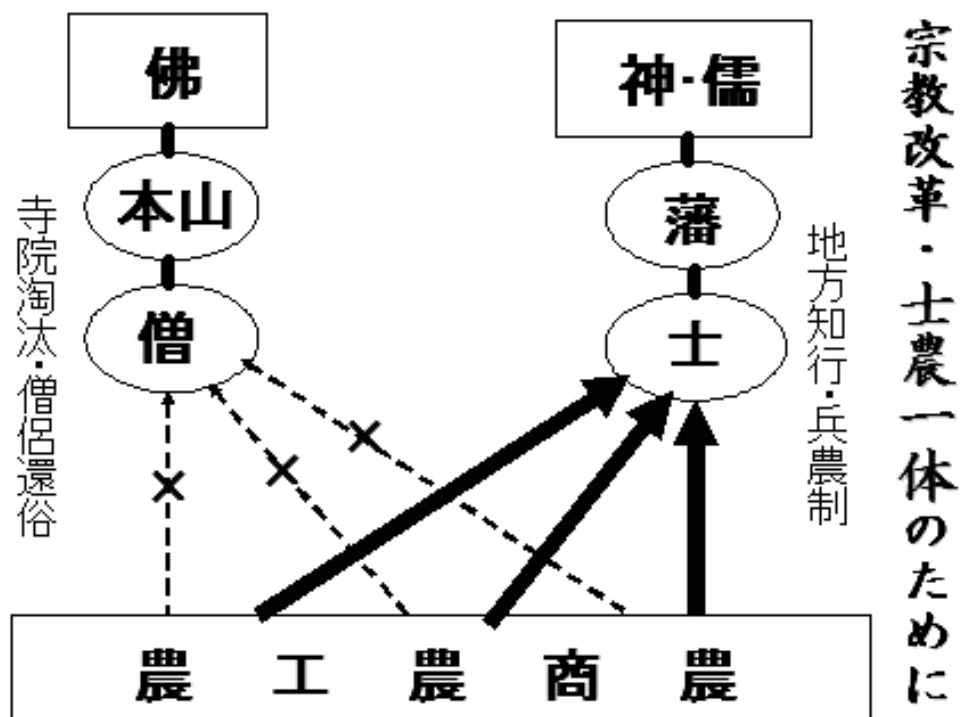
「地方知行（じかたちぎょう）制度」とは、江戸時代、大名が家臣に禄高にあたる一定の土地を分与し直接支配させる制度を言う。光政は岡山入府以来この制度を採用していたが、

一六五四年の備前大洪水による飢饉を機に各家臣の徴税権を吸い上げて全領直接支配に切換えた。しかしながら各家臣には引続き知行地に居住することを命じていた。

この本来的な地方知行制度の意味を失って以後、光政がなぜ各家臣を地方（じかた）に配置したかについて、谷口澄夫氏（元岡山大学長）は「この解答は目下のところ史料的明徴がないので困難というほかはない」（岡山藩政史の研究）と述べている。これについては熊沢蕃山の農兵論の考え方を光政が受け容れ、有事の農民の円滑な動員を考えていたからと思料すれば至ってすっきりとする。しかしこれについても史料的なもの出現は期待できない。

ここで蕃山の農兵論の要点を紹介する。「士が有事に動員される農民と平素からともに生活し、主従数代の恩義を重ねていれば、有事士に五人七人が付いて来るような強固な関係が期待される」旨蕃山は書き残している。

この武士の地方配置は隠居光政の生存中は続けられたが、その卒去とともに廃止され、在地の家臣は城下



や陣屋地区に引き上げられている。

⑧在の鉄砲打ち

下の表は、冒頭の一六八〇年の鹿狩のうち岡山で行われた一月の牟佐の狩と十一月の半田山の狩の人数などを比べたものである。一万八七七四人を動員した牟佐の狩は光政が行ってきた狩の中で最大規模のものであった。一方、七千三十七人の半田山の狩は規模的には前者の約三分の一であったが、在の鉄砲打ちの数は牟佐のときの百六十四人が半田山では二百六十二人に増え、参加した士の数もほぼ倍増しており、半田山の鹿狩は前者よりも質の高い訓練が行われたものと見ている。

その中で注目点は、両狩ともに和気郡（現在の和気郡と備前市全体）からは在の鉄砲打ちのみが参加したことである。牟佐のときは犬引き人足を含んで四十二人であったが、半田山では百人が参加している。当時和気郡には百姓による鉄砲隊があったようだ。

この和気郡の鉄砲百挺に関連する蕃山の遺事を紹介する。蕃山が備前を去るにあたり養嗣子の政倫（光政の三男）へ残した「熊沢助右衛門殿譲物目録」の中に鉄砲百挺とある。当時岡山藩が三千石の士に対して命じていた鉄砲の常備数は六挺であったから蕃山の百挺がいに大きなものであったか、鉄砲組番頭（ばんがしら）ならではである。（蕃山の三千石番頭については次章で述べる）

蕃山は、学者でありながら鉄砲組番頭として藩から預けられた百挺の鉄砲を以て士農混成の鉄砲隊を編成し、訓練をしていたはずである。即ち火薬を使用する鉄砲の集団的な運用にはそれまでの刀槍弓箭の運用よりも数段事故回避のための規律訓練が必要であったからである。そのような和気郡の風土風潮が蕃山が備前を去ってから二十年余を隔てた一六八〇年の半田山の狩に登場したということである。

ここで在の鉄砲について注目すべき背景に触れたい。即ち当時幕府は天領において鉄砲改めを始めていたということである。一六五七年一月幕府は関東の幕領に対して「山中筋、これ以前より鉄砲御免の所は格別、その外在々所々において鉄砲所持すべからず」との条文を発令した。その背景には由井正雪の乱などの浪人問題や明暦大火後の社会不安があったとも言われている。

この時代に光政・蕃山は、防御における鉄砲の有用性を十分に認識し、在の鉄砲打ちの訓練を奨励してい

たのである。これより一世紀昔のことであるが、織田信長は一五七〇年から大坂の石山本願寺を攻めていたが戦局が好転せず、一五七七年二月と三月石山側の戦力の中核である雑賀衆の根源地である紀州雑賀に十万といわれる大軍を動員して攻勢をかけたが、鉄砲隊を主体とする数千の雑賀衆を攻めきれなかった。光政らは、このような鉄砲隊

牟佐と半田山の鹿狩の比較 1680

	牟 佐 (1/27)	半田山 (11/14)
惣人数	18,774人 在(八郡)からが95%	7,037人(牟佐の約1/3) 在(五郡)からが約半数
在の鉄砲打	164人 内和気郡から42人	262人 内和気郡から100人

備考: 1. 半田山の狩は牟佐の狩に対して

士の増加(1.7倍)、在鉄砲打の増加(1.6倍)

2. 両方とも和気郡からは鉄砲打のみ参加

3. 半田山の狩には町民二千を参加させた

の威力を十分知っていたはずである。

光政にとって和気郡における蕃山の農兵制論や在の鉄砲打ちの指導統制が武士の地方配置の真の狙いであったと言えよう。しかしその後蕃山の手本が藩内に普及しなかったというのが実情である。

⑨土農一体は古いか

近代・現代の学者間だけでなく、当時の学者や為政者間でさえも蕃山の農兵制論は時代遅れ・時代錯誤と見られていたようだ。それは当時平和が続いていたからそのように見えていただけであって、幕末黒船の来航を見てからは幕府も各藩も競って農兵隊を編成したように土農一体は戦力増強策の第一ステップである。

また光政の教育政策・宗教政策は、日清・日露両戦役で勝利を得た明治政府のそれに通底するものと見ることができる。

第三節 予めお断りしておくこと

①「それは何に書かれているか」

この光政の「備前東部籠城戦略」について話し始めると、歴史研究家はもちろん一般の人からも「それは何に書かれていたのか」と最初の質問が飛んでくる。しかしこれは何にも書かれていない、書き残された「史料」は一切ないということである。

歴史には、史料があつて「歴史学」になじむものと、史料がなくて「歴史学」にはなじみにくいものがある。この世の中では初めから一切書き留められない事実、書き残されたものが総て消失してしまった事実、証拠を一切意識的に消去してしまった事実などいろいろあるが、これらは「歴史学」に取り上げられることは極めて稀である。

この「備前東部籠城戦略」は、その証拠を意識的に消去してしまった事実該当し、これが歴史上の事実であることを個々の部分から証明することは困難である。なにとぞ本論の全体を通じて理解を賜り、納得していただきたいと思っている。

②「平和な江戸時代に防衛準備が必要であったか」

光政・蕃山のいわゆる「仮想敵」については次章で述べることとして、「幕末はさておき、江戸時代は防備など不要な平穏な時代であった」という説に反論したい。

江戸時代二百数十年の歴史を知っている平成の私たちは、平穏であった十七世紀の中葉に光政が幕府に命じられもしないのに行つた領国の防備強化など全く無意味であつたと言ふことができる。しかしそれは結果論であつて、昔も今も為政者は未来に起こりうるすべての事を真剣に考え、それに対処する策を準備するのが当然の責務である。

ここで東京大学名誉教授丸山真男氏が「江戸時代の日本は『兵営国家』であつた」と書いている一節を紹介する。

「江戸時代の世界史的なパラドックスは、爪の先まで武装し、一朝事あるときには直ちに戦時総動員体制に切換えられるような統治組織と、反乱・暴動・内乱等のあらゆる萌芽をいち早く摘みとるように網の目のように張りめぐらされた相互監視と密偵のメカニズムとをもつて、二世紀半にわたつて政治的安定を維持し、『天下泰平』のイメージを普及させたことにある。」

こう言われてみると、私どもが江戸時代イコール平和な時代と見るのは舞台の表側だけを見て、その裏側を見ていなかったということである。

③「なぜ今そのような説が出てきたのか」

「この三百五十年間聞いたこともない『備前東部籠城戦略』なる説が今突然出現するなどということが本当にあつてよいものか。そのような説は妄想ではないか」と思う人も多いかと思う。そこでこの三百五十年間この説がなぜ世に出なかったかについて考えてみたい。

この戦略は幕府に隠れて準備された「軍事行為」であり、江戸時代の二百年間はそれが表に出ることがないように岡山藩としては細心の注意を払ってきた。次の明治維新から昭和二十年の敗戦までの八十年間は皇国史観の時代であり、岡山藩が幕藩体制にもとる下克上の行為を準備していたなどは、池田光政の名誉のためにもまた光政から連綿と続く池田侯爵家の名誉のためにも言えなかった。そして戦後の七十年間は無防備中立論が世に跋扈していた時代で、「防衛」を論ずる者を「軍国主義者」と呼び「国を滅ぼす者」と誹謗してきた時代であつた。しかしこの敗戦の後遺症もようやく沈静化しつつあり、国防が尊い行為として見直されようとしている。もう一つは第①項の繰り返しになるが、戦後盛んになった近世史研究特に池田家文庫諸

史料の研究において、和意谷・閑谷・井田などに関する諸史料から軍事的な匂いが一切消されていたことから歴史学者が軍事的観点からそれらに着目することがなかったこともその一因である。

私はこの「光政の備前東部籠城戦略」との出会いを運命的なものと思っている。昭和十年生まれの私は光政が最晩年の十年間を過ごした岡山城西の丸にあった小学校に六年間通った。一九五八年防衛大学校を卒業（第二期生）、陸上自衛隊に陸上自衛官として（幹部候補生から一等陸佐まで）三十有余年奉職し、この間幹部学校指揮幕僚課程（旧陸軍の陸軍大学に相当）に二年間学ぶなど陸戦に関する素養を身につけた。また職務とした情報分析は歴史資料の分析にも通じるものであった。定年で郷里岡山に帰り、県内外の史跡を巡っていて和意谷・閑谷・井田の謎に突き当たり思い至ったのがこの戦略の存在である。

なお備前市や和気郡の方に聞いたところでは、「閑谷学校は軍事施設」などの噂は昔からあったとのことである。本論の発表を機にいろいろ隠されていた事実、埋もれていた文書などが明らかになることを期待している。

第一章 光政・蕃山の防衛構想

第一節 池田光政と熊沢蕃山

① 池田家の略史

光政が幕府に提出した「池田氏家譜集成」によれば、池田家の遠祖は**楠正行**（まさつら）である。一三四年正行が四条畷に赴く際、身籠った妻を美濃の池田郡（又は池田村）に帰した。正行の戦死後妻はその遺子連れて池田家に再嫁し、その後正行の遺子が池田家を継ぎ、その子孫が今の池田家ということである。

光政の祖父は、白鷺城を建てた姫路城主**池田輝政**である。その祖母は織田信長の乳母で、その子恒興（輝政の父）は信長の乳兄弟であった。恒興は織田家で活躍していたが、本能寺で信長が倒れてからは羽柴秀吉の麾下に参じ、小牧・長久手の戦で徳川軍に囲まれて戦死した。池田家を継いだ輝政は、中川氏の娘と結婚し、長男利隆（光政の父）が生まれた。しかし父の仇の徳川家康からの申し入れで妻を離縁し、家康の娘富子を後妻にした。正に政略結婚である。後妻富子が生んだのが小早川秀秋の後に岡山城主となる次男忠継と三男忠雄である。輝政は関ヶ原の戦で東軍に属し、戦後播磨五十二万石の姫路城主に封ぜられた。

さて岡山城を建てた宇喜多秀家は、関ヶ原の戦で敗れて八丈島へ。その後に同合戦の論功行賞で小早川秀秋が岡山城に入ったが一年余で亡くなり、その後に輝政の次男忠継（家康の外孫）が岡山藩主二十八万石に封ぜられた。同時期輝政の弟長吉が鳥取藩主六万石に封ぜられ、その後輝政の三男忠雄が淡路藩主六万石に封ぜられたから、池田家全体では九十二万石（俗称百万石）となり、輝政は「神君の婿」として「西国の將軍」とまで謳われた。しかし岡山藩主忠継は当時五歳であったから、代りに輝政の長男**利隆**が備前監国として岡山城に入った。その時代の一六〇九年、利隆の嫡子として**池田光政**が岡山城で生まれた。

輝政は一六一三年に卒し利隆が姫路城主を継いだ、その際四十二万石に減封されている。その利隆も三年後に卒し光政が継ぐことになったが、八歳の彼に播磨の地の継承は重過ぎるということになって、因幡・伯耆三十二万石の鳥取城主に転封させられた。しかし光政にもつきが回ってきた。幕府からも光政が逸材に見えたのか、一六二八年千姫の娘と結婚することになった。**千姫**といえば二代將軍秀忠の長女で、豊臣秀頼に嫁ぎ、大坂夏の陣で坂崎出羽守（宇喜多秀家の従兄弟）に救出され、後に本多忠刻に嫁いで一女をもうけた。その一女勝子と結婚したのである。千姫は三代將軍家光の同腹の姉であったから、光政は当時の將軍の姪婿であった。

さて当時の岡山城であるが、城主忠継が一六一五年十七歳で亡くなり、その後に輝政の三男忠雄が淡路から転封した。その忠雄も一六三二年に亡くなり、遺子光仲がまだ三歳であることを理由に岡山藩の池田家と鳥取藩の池田家の国替えが命ぜられた。かくして光政は禄高は五千石減ったが岡山城主となり、陽光燦々、水は豊かで緑に溢れ、働き者の領民を抱える備前の地でその天分を発揮することとなったのである。

② 「明君・池田光政」

下の写真は今も時々歌舞伎座などで上演される「明君行状記」という芝居の一場面である。昭和の初期、劇作家の真山青果は池田光政の明君ぶりを戯曲にし、外題を「明君行状記」とした。現在歌舞伎の外題は数百あると思うが、その中に明君あるいは名君と入っているのはこの芝居だけである。

井沢元彦氏の「逆説の日本史」の第十六巻は「江戸名君編」で、江戸初期の徳川光圀、保科正之、池田光政の三名君と江戸中期の上杉鷹山を取り上げている。光政に関しては「閑谷学校は世界史の金字塔」「幕府の寺請制度を否定した神道請制度」「幕府の兵農分離を否定した民を労る信念」の三項目を賞賛の柱にしている。

また光文社新書の「江戸三百藩バカ殿と名君—うちの殿様は偉かった?」は、徳川三百年三百藩を通じて藩主のナンバーワンは池田光政としている。その第一の理由として閑谷学校などの学校制度の構築を挙げ、この学校制度は世界最先端と言ってよいと書いている。しかしこの学校制度などは光政の明君たる要素の何分の一かではあるが、最大のものは国防に関する信念と実行、特にこれから説明する「備前東部籠城戦略」の推進であったと私は信じている。



③ 当時の東アジア情勢

当時の東アジアの情勢を見てみると明から清への交代が宋から元への交代によく似ており、第二の元寇なしとしない状況であった。一六一六年満州でヌルハチが金国を興し、一六三六年モンゴルを征して大清を号し、翌年には李朝朝鮮を服属させ、一六四六年明の都のあった北京に遷都した。大陸を追われて台湾に渡った明の旧臣鄭成功らは抗清運動を続け、二度にわたり日本に救援を求めたが幕府は見殺しにした。なお鄭成功の母は日本人で、近松門左衛門の戯曲「国性爺（こくせんや）合戦」は彼の活躍ぶりを描いたものである。

一六五〇年蕃山が光政によって三千石番頭（ばんがしら）に取り立てられた当時、蕃山は明を滅ぼした北狄清を、宋を滅ぼした北狄元に重ねて見て、「北狄中国を取りて日本に來りしこと度々なり」と第二の元寇に備えるべきことを強く主張していた。

④ 当時の隣国—播州赤穂の情勢

備前の近傍では隣国播州赤穂の情勢に変化が見られた。赤穂郡三万五千石は光政の叔父池田輝興の領地であったが、その叔父が一六四五年突然発狂して妻を刺し殺した。直ちにお家断絶となり、その後に笠間の浅野家が入り五万三千石に加増された。本家は広島浅野家である。この転封については池田輝政の播磨五十二万石から三十一万五千石に落とされた備前池田家に対する幕府の懸念からと見られている。

やがて幕府から赤穂藩に城を普請したければ造ってもよいぞと申し渡しがあった。すなわち造れという命令である。一国一城令の世にあって播州には彼の姫路城があることであり、浅野家は城が欲しいとは一切思っていなかったが、幕府の意向とあれば早々に築城計画を練り上げ、幕府の許可を得て築城に取りかかった。



一六四八年のことである。この赤穂城は江戸時代最後の本格築城と言われている。

それから十三年掛かってようやく城が完成したが、天守閣は造っていない。五万三千石の赤穂藩にとって本格的な築城は相当の負担だったようで、このとき製塩に力を注ぎ、その利益を築城に注いだとも聞いている。

なお築城開始から四年後の一六五二年、赤穂藩は高名の兵学者山鹿素行を禄一千石で召抱えた。素行は築城作業を一時中止させて縄張りの一部修

正を命じたとのことである。次に登場する熊沢蕃山は三十一万五千石の岡山藩で禄三千石に取り立てられたが、素行は五万三千石の赤穂藩において大石家千五百石に次ぐ一千石をもらったのだから、その比率を考えればこれも相当の厚遇であったことが分かる。

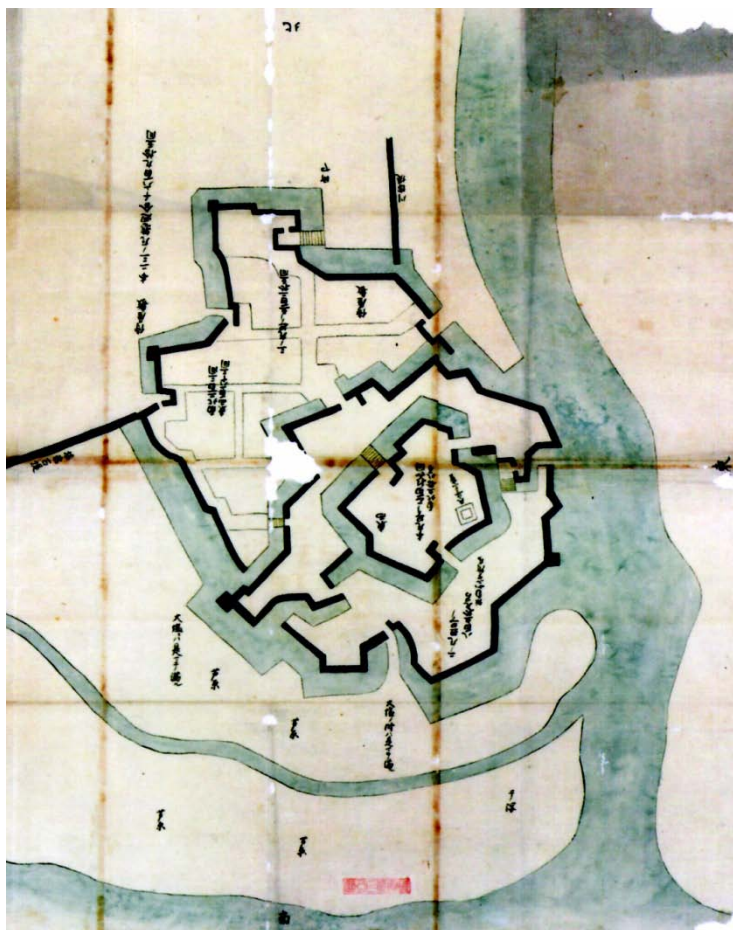
⑤ 蕃山の三千石取立て

このように隣国赤穂で大築城が始まり、光政の心の穏やかならざる日々が続いた。そのようなとき学者の蕃山に声を掛けると防衛戦略に関して次々と素晴らしい案を建策してくれる。そこで光政は、蕃山にそれなりの地位を与えて二人で力を合わせて岡山藩の防衛体制を整えようと決心し、知行三百石の彼を三千石の番頭（ばんがしら）に昇進させた。それは一六五〇年五月三十日のことであった。

しかし藩内ではいろいろとやっかみ論議が起こり、それが光政の耳にも入ってきた。蕃山取立てから八ヵ月後のこと、光政は重臣たちを集めて土道のあり方について教諭するとともに、蕃山の昇進に触れた。そのときのことが「池田光政日記」に書かれている。

「この度熊沢取立て候こと、重々わけ有りての事なれども、その次手に数年斯様にしたきと思いたる事なれば、**軍用の事専らに仕うべきこと**申付けぬ」





この重臣に対する説諭は、蕃山取立てに対する藩内のわだかまりを解くためのものであった。この日記の中の「**軍用の事専らに仕うべきこと**」について、その席で噛み砕いて説いて家臣を黙らせたものと思われるが、その内容は極秘事項であり書き残されたものはない。一儒学者が三千石の侍に昇進したことについて岡山藩研究の第一人者で岡山大学学長も勤めた谷口澄夫氏は「破格の昇進であり、岡山藩政史上唯一の例外である」と。また東京大学教授でわが国近世史の専門家であった尾藤正英氏は「学者が三千石の番頭という武官の高い地位に登用され、藩政の中枢に参与する」というようなことは、これ以前にもこれ以後にも、また幕府でも藩でも、幕末期を除いては一度もなかった」と書いている。このように両先生とも学者の三千石昇進はきわめて異例な出来事と認めているが、「軍用の事専らに仕うべきこと」については深く考えていない。古文書に残されたこと以外は考えないというのが学者流か。

ここで「**軍用の事専らに仕うべきこと**」の中の「**軍用の事**」という言葉の意味を考えてみよう。



江戸期の学者番付表。東大関に蕃山がすえられている。
(資料)「学者角力勝負附評判」(東大図書館所蔵)

一般に軍人に求められる軍隊運用能力のレベルには戦技—戦法—戦術—戦略とあるが、光政が蕃山に求めたのはどのレベルであろうか。蕃山は知行三千石で「鉄砲組番頭」に任ぜられたが、彼が鉄砲の撃ち方＝戦技に優れていたとは思えない。また鉄砲隊の指揮＝戦法が得意であったとも思えない。また有事の藩兵の運用＝戦術に関して期待されていたとも思えない。これについては蕃山自身が「身を顧れば人を下知すべき本よりの士大将にも非ず」と言っている。

光政が蕃山に期待した「軍用の事」とは、長期的な視点からの有事対処に関する建言すなわち「戦略」であったに違いない。

⑥ 熊沢蕃山の評判

以上のように三千石に取立てられた蕃山であるが、世間の評判はどうだったのか。前頁の表は東京大学の図書館に残っている江戸時代の学者番付で、西の最高位は新井白石、東の最高位に蕃山が据えられている。蕃山が江戸期の最高の学者と見られていたのである。なお白石は蕃山に三十八年遅れて生まれている。

下の写真は、「生写（しょううつし）朝顔話」通称「朝顔日記」という歌舞伎の一場面で、侍・駒沢阿曾次郎と姫君・深雪とのラブロマンスである。侍の姓の駒沢は熊沢から、名の阿曾次郎は二郎八から来ており、蕃山をモデルにした芝居というのが通説である。蕃山の三千石取立ては、当時全国的大ニュースだったらしい。



阿曾次郎…海老蔵 深雪…玉三郎

生写朝顔話
朝顔日記

もう一つ蕃山の評判を高めたものに將軍家光からリクルートのための面接予告があったことだ。家光は蕃山の評判を聞いて幕府お抱えの学者に取立てるべく、蕃山に対して一六五一年五月四日拝謁を許す旨連絡していたが、その直前の四月二十日逝去した。もし蕃山が幕府に抱えられて將軍の學術指南役についておれば、その後の彼の人生は相当変っていたものと思われる。

⑦ 蕃山の戦略思想

それでは熊沢蕃山はどのような戦略思想を持っていたかについて、蕃山研究の第一人者で岡山大学教授でもあった宮崎道生氏の論を要約させていただく。

第一は、北狄侵攻に対する防備策を用意することが現実喫緊の施策の基軸であると主張している。北狄侵攻とは清が朝鮮半島を経由して侵攻して来ることで、蕃山は当時の清の膨張ぶりから元寇とダブらせて考えていたのである。これが彼が幕府から忌避された一番の要因であったと言われている。清のわが国への侵攻は、明の残党の跋扈などのお陰で結果としてはなかったが、施政者としては十分考え準備しておくべきことであった。（次の⑧項で付言する）

第二は、徳川政権を絶対視せず、もし徳川が謙徳を失う場合には政権の交代もありうるとしている。このような思想を持っていると幕府に好かれることはない。

第三は、文化の保持者たる天皇及び公家の存在を重視するということで、これは前項と表裏の関係にある。

第四は、四民制一士農工商一下において「士農一体」＝農兵制論を唱え、有事には村々に配置した侍がそれぞれ農民数人を引き連れて戦場に赴くべしというものである。屯田兵というのは農山村に入った侍は平時農業に従事し、有事にはその侍だけが応召するというものであるが、この農兵制というのはいざというときには在地の侍が多数の農民を連れて防衛の任に就くというものである。この農兵制論について、これは兵農分離という歴史の進歩に反するもので、蕃山の考えは古いと決めつける蕃山研究者もいるが、二百年後即ち

幕末の各藩の農兵隊の編成を思えば、これを古い考えと言うことはできない。

第五は、兵糧を多く貯え置くことが第一の急務であると蕃山は言っている。

⑧ 北狄侵攻に対する防備策

ここで蕃山の思い描いていた北狄侵攻の様相とそれに対する岡山藩の防備策について考えてみたい。わが国に対する北狄侵攻の事例としては一二七四年と一二八一年の二度にわたる元寇があるが、両役ともに鎌倉幕府が動員した九州などの武士が北九州地区で奮闘して元軍を撃退した。この戦例からわれわれは「北狄侵攻対処イコール北九州における防衛戦で勝利を得ること」までしか考えようとしなない。しかし相手の元は中国全土を平定し、ユーラシア大陸を西進して今のポーランドまで攻め込んだ国である。元は侵攻にあたり、北九州を占領後、瀬戸内海を東進して畿内を占領しなければわが国は屈服しないと読んでいたはずである。蕃山も清の侵攻は畿内まで迫るものと考えていたものと思う。

この北九州から畿内に至る縦深の防衛準備の歴史としては、六六三年わが国が朝鮮半島の百済に送った援軍が白村江で唐軍に敗れてから、大和朝廷が唐軍の侵攻に備えて北九州から瀬戸内海の両岸、そして生駒山地にかけて二十三個の山城を築いた例があり、そのときの山城の遺跡が今も各地に残っている。当時備中では岡山城の西北約二十 里に鬼ノ城（きのじょう）山城が、備前では岡山城の東北約十 里に大廻小廻（おおめぐりこめぐり）山城が築かれている。両山城とも当時の瀬戸内海航路の「吉備の穴海」に影響を与えられる山の上にあつて、土塁をめぐらせて有事籠城作戦を可能にするものであつた。

光政と蕃山が右の例を知っていたかどうかは不明であるが、両人の元軍侵攻対処策は、大和朝廷の唐軍侵攻対処策と同様のことを考えていたものと思う。

第二節 備前東部籠城戦略とは

①光政と蕃山の防衛構想

さてそれでは明君ナンバーワンの光政と学者ナンバーワンの蕃山の二人の知恵の結晶である岡山藩の防衛構想の推理に移る。

その根本は、わが国体を末永く守らなければならないという尊王意識のもと、平素から朝廷との関係を築いておくということである。これについては次の項で付言する。



次に防衛の対象—いわゆる仮想敵については、蕃山は当時明を滅ぼした北狄清による第二の元寇の恐れを唱えており、光政もこれを受容していたものと思われるが、その切迫感には差があつたようだ。国内では、光政は「西国将軍」輝政に課せられていた「西国外様大名の東上阻止」という役割をこの備前の地において継承することを幕府から与えられた最大の任務

と認識していたはずである。それともう一つ光政と蕃山はこの当時としては特異な考えを持っていた。それは徳川家の幕政担当者が謙徳を失って道理に外れた邪心を持ち、一方光政側に国体護持という正義がある場合、もし徳川に攻められることがあれば正義のため断固としてこれに対抗すべきであると考えていた。徳川から攻められることに対する光政の憂慮が相当深刻であったことについては第二章第一節を見ていただきたい。

以上のような北狄清国軍、西国大名軍あるいは徳川幕府軍という大軍の侵攻から藩領を守るために光政と蕃山が考えていた策は次の四点に要約されるものと考えられる。

- 一．人的戦力を最大限召集すること。そのための方策が前章で述べた「士農一体」である。
- 二．地形を利用してそれを戦力とすること。楠正成は赤坂村・千早村の險阻によって一千余騎で以って十万余騎の大軍を退けている。
- 三．時間と資金をかけて防衛のための諸準備を周到にする。
- 四．侵攻する大軍に対して持久戦を継続しつつ、同志の増援を得て反撃に転じ勝利を得る。

そこで、このような持久作戦＝籠城作戦を遂行する上で最適の場として光政と蕃山が選んだのは、宇喜多秀家以来の岡山城ではなく、**片上湾を含む備前東部地区**であった。この推論の根拠について本章及び次章で詳述する。

②朝廷との関係―尊王意識

ここで谷口澄夫氏の「池田光政」中の光政の尊王意識に関する論述を紹介する。

「光政の尊王思想については、資料的な確証は乏しく、またその政治的立場から表面にははっきりと現れていないが、内実はかなり確乎とした尊王意識を持っていたものと思われる。光政が池田氏の出自に関して楠胤説をうたい、また楠氏の軍法が広大な徳を特性としている点を嘆美していることなど、光政が楠正成の特性と事蹟に血のつながりを意識し、正成にあやかろうとしたことは十分に認められ、ひいてはこれが尊王意識の基底になっているものと推量できる。

また一六四九年、光政は第二女輝子を一条右大臣教輔に嫁がせ、参勤・帰国の途次しばしば一条家に立ち寄っている。（また綱政も養女を一条右大臣家に嫁がせている）これらも尊王とからませて考えられる。」

この光政・綱政二代にわたる大名家と公家との縁組は、武家諸法度、公家諸法度にもとるものであるが、それを可能にしたのが千姫（天樹院）の存在であったといえよう。

なおこの縁組の結果として一六七三年京都の大火で禁裏及び仙洞御所が罹災した際、幕府から岡山藩に禁裏造営の国役を課せられ、六万五千両余という膨大な出費を強いられている。

③岡山城籠城策の否定

光政が岡山城でもって持久を策するつもりがなかったと見た理由の一つ、それは「軍陣第一」とする光政が岡山城の強化策をほとんど講じていないことである。

宇喜多秀家が岡山城を築いた当時、鉄砲の射程は五十 m 程度であったから、川幅が百 m を超える旭川を岡山城の北側から東側にめぐらせたので、秀家はこの方向からの敵の攻撃は恐れていなかった。しかし江戸時代になり大砲（大筒、射程約三百 m ）が戦場に出現し、かの大坂冬の陣・夏の陣では大活躍をした。岡山城でも侵攻する敵が旭川の対岸に大砲を布置すると砲弾が城内に落ちることになった。そういう時代が来ているにもかかわらず、光政は対抗策をほとんど講じていない。

なぜ光政と蕃山が岡山城での持久策を採用しなかったかを地勢的に考察すると次の三点に要約される。

- 一．沖積平野岡山は地形的に脆弱で、この地で数倍する敵に対して長期にわたる持久作戦は困難である。
- 二．期待する増援勢力（味方）は主に瀬戸内海から岡山に入ることになるが、遠浅の干潟を越えて戦闘中の岡山に入るのは困難である。

三、清国軍の侵攻も西国大名軍の侵攻も瀬戸内海を畿内に東進することになるが、岡山城に籠城していたのでは敵の東進を効果的に妨害することは困難である、

以上のような思考に基いて光政と蕃山は岡山城に籠る案を捨て、他に適地を求めたのであった。

なお光政の卒去後岡山城を中心として防衛することに方針を転換した池田綱政は、それに伴う種々の施策を講じている。(終章第二節参照のこと)

④備前東部地区とは

それでは光政と蕃山が選んだ備前東部地区を観察しよう。この地区は山陽道を扼する当時の和気郡（現在は備前市と和気町）の中心部で、東は国境の山並で播磨に接し、西は吉井川で画され、北は山地の先に美作があり、南は片上湾口から瀬戸内海に繋がっている。

この地区の要点は前ページの図のとおりで、船坂峠、帆坂峠及び寒河（そうご）峠は東からの侵攻を阻止する上の要点であり、和気村及び熊山・大ヶ池は西からの侵攻を阻止する要点である。和意谷は山間峡谷を南下する敵を阻止する要点で、片上湾口は、瀬戸内海からの敵の水軍を阻止する要点である。そしてその中心に位置するのが閑谷であり、閑谷から片上湾への出口に井田（せいでん）がある。この円陣の直径はおおむね十五 里である。

この円陣の規模をちょうどこれより一千年前の鬼ノ城（きのじょう）及び大廻り小廻りの山城と比べてみよう。総社市の鬼ノ城遺跡及び岡山市の大廻り小廻り遺跡の山城は、既に述べたように六六三年百済が滅亡した直後に唐の来寇に備えるべく築かれたと見られているが、この二つの山城の長径はいずれも一 里程度あり、光政と蕃山の清の侵攻に対する防衛構想の雄大さが偲ばれる。

なお光政と蕃山は、有事この円陣に三〜四万人程度の領民（うち武士は六千人程度か）を入れるつもりであったと考えられる。

⑤備前東部地区の戦略的特性



有事岡山藩が籠城を企図していた備前東部地区の戦略的特性を考察すると、次の四点に要約される。

- 一、 山陽道を東上する敵に対しても西下する敵に対しても隘路を活用して持久戦を行うことができる。
- 二、 瀬戸内海から船艇をもって迫る敵に対しては鹿久居島—大多府島—長島の線から片上湾に至る縦深のある水道を利用すれば十分持久できる。

- 三. 円陣内に東西両面に対処するための内部機動路―山陽道及び旧山陽道―がある。また片上湾から和意谷までの南北の機動については道路の整備が可能である。
- 四. 片上湾は瀬戸内海からの援軍及び援助物資の受入れ揚陸に適しており、また地区内には援軍を受け入れるに十分な地形地積がある。

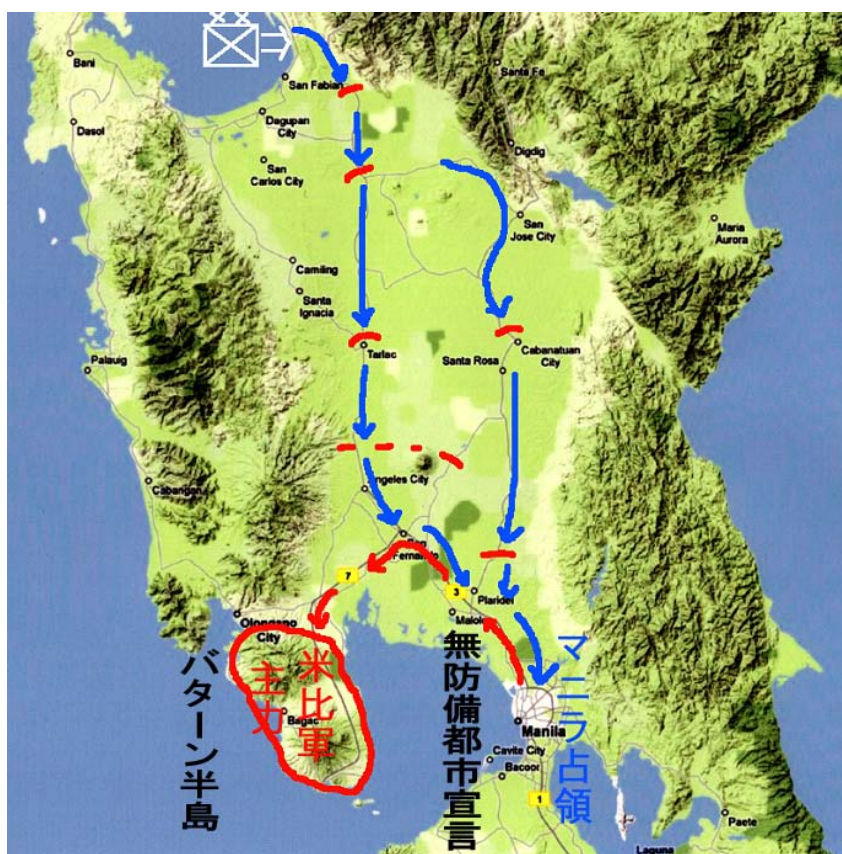
備前東部地区が以上のような持久作戦に必要なにして十分な地形的特性を備えていたことが、光政と蕃山にここに籠城するという作戦構想を立てさせたのである。

⑥比べるべき戦史例

ここで光政は本当に岡山城を捨てて備前東部に籠るつもりだったかと思う人に一つの戦史を紹介する。

それは光政の構想から約三百年後の大東亜戦争の初期、日本軍が比島攻略作戦を行った際のマッカーサーによる米比軍のバターン半島籠城作戦である。一九四一年十二月日本の陸軍は南方へ進出し、香港攻略、マレー・シンガポール攻略、それに比島作戦に遅れて開始した蘭印（ジャワ島）攻略作戦も順調に進んだが、このフィリピンのルソン島進攻作戦では苦戦している。開戦前大本営は、ルソン島進攻作戦はマニラを占領すれば作戦目的はほとんど遂げられると考えていて、上陸部隊はマニラを目指して進んだが、マッカーサーはマニラ市の無防備都市宣言を発するとともに、マニラ周辺にいた米比軍約八万人をマニラ市の西方約百のジャングルに覆われた伊豆半島ほどの大きさのバターン半島に籠らせた。このジャングルに拠る米比軍の攻略にわが軍は手を焼き、バターン半島の陥落は一九四二年四月、さらに半島に隣るコレヒドール島要塞の攻略に一月かかっている。マッカーサーは回想録の中で「バターンへの撤収という戦略構想を立てたことと将兵たちの見事な行動で、日本軍の前進を何か月も遅らせることができた」と誇らしげに記している。

わが軍の苦戦した戦史をあえて持ち出したのは、持久を目的とした陸戦においては地形の利用が大原則であるということを強調したかったからで、光政も蕃山もそれをしっかり理解していたということである。



・一九四一年十二月下旬・ルソン島
バターン半島籠城作戦

第三節 備前東部籠城戦略を証明するもの

①備前東部籠城戦略を窺わせるもの

それでは何を以って備前東部籠城戦略があったと考えたかということであるが、それは一六六六年天樹院（千姫）卒去後、光政が突如開始した和意谷墓所、閑谷学校、井田及び倉安川の四つの作事の真の狙いは何かということを検討して得た結論である。この四つの作事の隠された狙いについては第二章でそれぞれについて詳述することとするが、これらの作事以外にも同戦略に関連があると考えられる事象が備前東部にいろいろと残されている。それらを年代順に列挙すると次のとおりである。

- 一. 一六三二年、各家老の陣屋及び知行所の配置
- 二. 一六五〇年、蕃山の知行地経営と八塔寺山への屯田兵配置
- 三. 一六五六年、大多府島贋銀事件の幕府への偽りの報告
- 四. 一六六五年、山陽道上の要点である香登大ヶ池の移設
- 五. 一六八〇年、備前東部地区における大鹿狩（前章で既述）
- 六. 一七〇四年、永忠の隠棲知行地・奴久谷の経営（終章で論述）

この節では右の一から四までについて観察することとする。

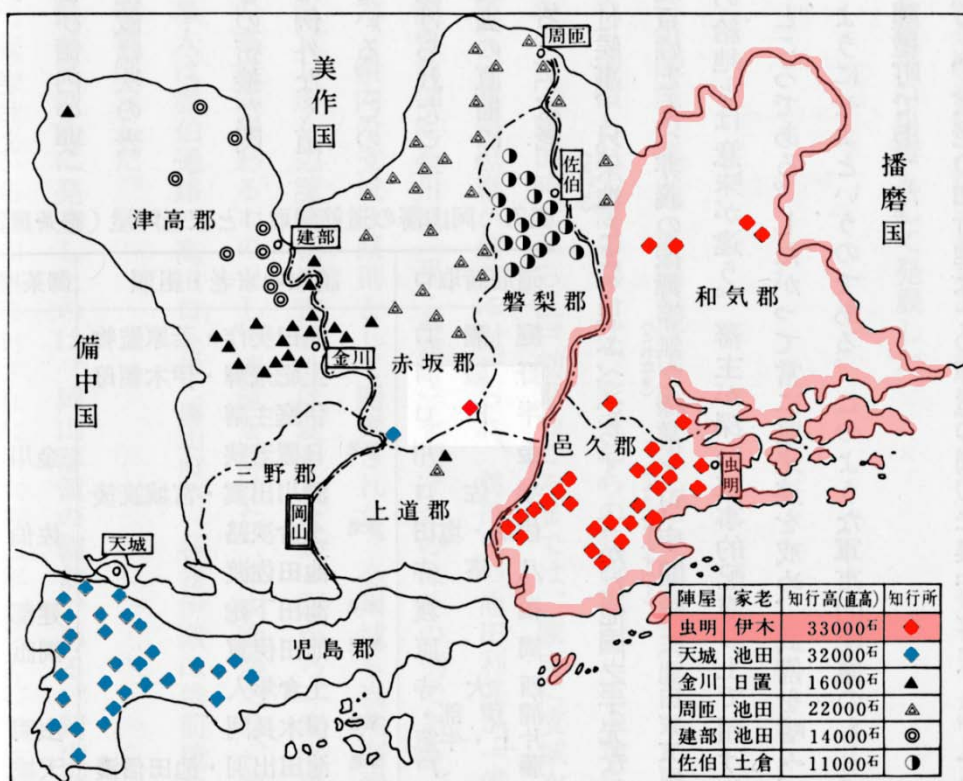
① 家老知行所の配置

家老知行所の配置については一六八二年五月、光政は遺言で、

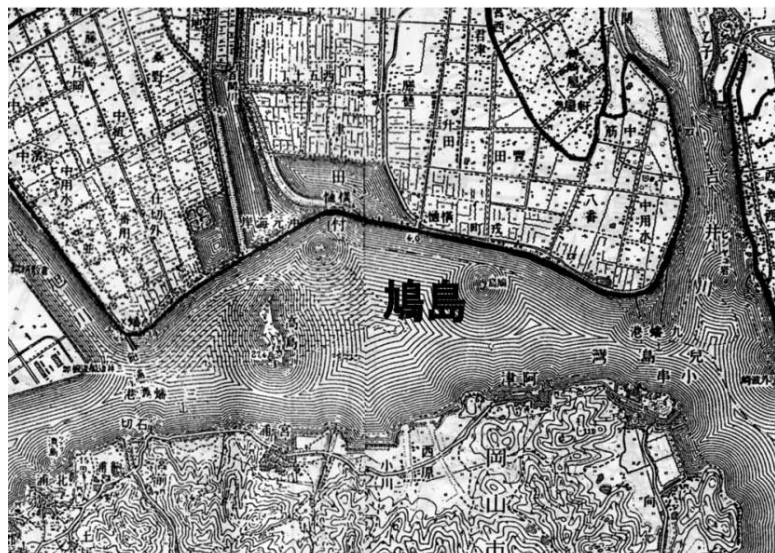
「家老中知行所之義はふかき考有之、地の利により申付候事。只采地（知行地）とまで思ふべからず。大かた他国之手先（目の前）なれば、家来之者共随分武備相嗜み風義能く、近郷之百姓どもへ非義の振舞等無之やう常々可申聞候。城下詰のものと違ひ下知とどき兼申べく候。（光政公伝下巻）」と
言った由であり、この遺言から知行所の配置については軍事的な狙いが周到に考慮されていたことが分かる

と谷口澄夫氏も尾藤正英氏も書いている。

下の図は、岡山県史第六巻（近世Ⅰ）に載っている岡山藩家老知行地分布図である。光政は、藩の六人の家老それぞれに藩内要地の経営を任せていた。筆頭家老の伊木を邑久郡の虫明に、次席家老の池田出羽を児島郡の天城に置き、それぞれに海岸沿いの防衛警備を委ねた。旭川沿いの道筋には建部（たけべ）に池田下総、金川に日置と重ねて置き、吉井川の道筋には周匝（すさい）に池田伊賀、佐伯に土倉と重ねて置いた。なお山陽道東西の道口は藩の直轄地としてそれぞれの要点に組頭の知



岡山藩家老知行地分布図



行地を配置した。

ここで注目を要する点は、知行高三万三千石の筆頭家老伊木長門を辺鄙な虫明に置いたことである。これは光政が東備沿岸特に片上湾の防衛を特に重視していたことを物語っている。もう一つ播磨との国境道筋の和気郡の中心部が空白になっているのは、ここが藩の直轄地であったことを意味し、その中の赤穂藩領に相對する寺口村、改称して蕃山（しげやま）村は一六五〇年から熊沢蕃山の知行地になっている。

③大多府島の秘匿

一六五五年十二月、岡山城の近くに設けられた目安箱に「某無人島において贋銀が造られている」との投書があり、早速藩役人がその島に行って調べたところ、自然の岩窟で贋銀が造られていた。津高郡金川村生まれの勘三郎を主犯とする一味十九名が捕らえられて磔（はりつけ）に、その一味の男子の子供・孫は全員斬首され、妻、女子の子供・孫は奴（下女）にされた。

この一件に関する岡山藩から幕府への報告では、現場は岡山の沖新田用地と児島の間の水道の中にある「鳩島」とされ、その後にかかれた「池田家履歴略記」は「今その窟を勘



三郎穴といふ」と書いている。文書に残されたものこそが歴史とすれば贋銀事件は「鳩島」で起きた事件である。しかしこれが大いに疑われる。鳩島は南北約百メートルの細長い無人島で昭和のバブル期に採石されて平たくなっており、岩窟が本当にあったかどうかは分からない。しかし鳩島は東西約八割、幅約

一帯の狭水道の中にあり、この水道は岡山藩、庭瀬藩、足守藩、天領倉敷の瀬戸内海への出口であり、また岡山藩にとっては旭川筋と吉井川筋を繋ぐものであって、当時舟便の往来は相当頻繁であったと推測される。この狭水道の中にある島で人目に隠れて煙の出る質銀造りができるはずがない。

一方、片上湾の東南方約七 町、長島の東にある「大多府島」には、島内の「勘三郎洞窟」で質銀が造られていたとの言い伝えが現在まで残っている。日生諸島の最南端にあるこの島は、東西約一 町南北約五百 町で当時は無人島であった。現場は島の南側の播磨灘に面する崖の下の岩の割れ目を入り口とする奥行二十 町、入口幅三 町、天井の高さ二十 町の洞窟で、人目を避けなければならない質銀造りにとっては最高の立地であった。

また一六五五年十二月晦日の光政日記に「虫明(むしあけ)にいた者を捕らえ詮索した」旨書かれている。大多府島から海路約八 町の虫明は日生諸島地区の中心的な港であり、一味の者が虫明に潜んでいたと言うことは大多府島説を補強するものである。なお児島湾内の嶋島は虫明から海路約二十五 町隔たっている。

以上のことから大多府島が質銀造りの現場であったに違いないが、それではなぜ光政は幕府へ偽りの報告をしたのであろうか。それは光政がこの島を戦略上の要点と認識しており、この島に幕府の役人を近づけて万一にも幕府に取り上げられては困ると思ったからに違いない。備前東部籠城戦略に必須の片上湾を守る上で日生諸島、なかでもこの大多府島が特に重要と考えていたものと推測される。

さて余談になるが大多府島関連でもう一つ注目すべき話がある。それは質銀事件から四十年ほど後の一六九七年のこと、鹿児島藩主島津綱貴の一行が参勤東上のため瀬戸内海を航行中に暴風雨に遭遇した。一行はやっとのことで大多府島の北岸に避難して事無きを得た。江戸に着いた綱貴は在府中の岡山藩主池田綱政に「この島は最高の避難港になる」と欲しそうな口振りで話した。綱政は早速岡山へ飛脚を飛ばし、津田永忠に大多府湊の造営を命じた。翌年永忠が奉行となって築港に着手し、石造の防波堤(現存=現在元禄波止と通称)、給水用の大井戸(六角形)、燈籠堂を造るとともに、在番所を設けて藩士を常駐させた。この話で連想するのが尖閣諸島問題で、わが国固有の島をいつまでも無人のままにしておいてよいのかということである。

④大ヶ池の改修

一六八〇年の鹿狩の話に戻るが、この年十二月四日、光政は岡山城を出て江戸に赴くついでに熊山で狩を行って猪十二匹、鹿十三頭を得ているが、このときの主眼は狩でも熊山山頂に上ることでもなく、その南麓一帯の地形偵察ではなかったかと思っている。すなわちこの熊山南部一帯は、岡山藩主力が備前東部地区に籠ったとき西から山陽道を来た敵を阻止する上の要点である。そして吉井川を渡って熊山南麓を東進した敵が突き当たるのが大ヶ池である。この大ヶ池の改修に関して蕃山の関与が認められる。

平安時代からの大ヶ池の池塘は、今の池塘から約百五十 町下がったところにあったが、一六五四年の備前大洪水の際に決壊した。決壊した池塘は応急修理されたが、老朽のため各所の漏水が止まず全面修理が必要な段階に達していた。そこで一六五八年十月、村の肝煎は蕃山村に隠



棲中の熊沢蕃山を訪ねて検分を懇請したところ、蕃山は直ちに実地踏査して「今の古い池塘を廃して新規に池塘を築造するほうがいろいろの面で有利と考える」と述べるとともに、藩庁に意見書などを繰り返し提出したが藩からは何の手応えもなかったと言われている。蕃山の池塘移築の要否に関する判断要素の中には、当地の戦略的意義の認識が大きく入り込んでいたものと推測される。

蕃山が岡山を去ってからは池塘移設の話は沙汰止みになっていたが、一六六五年急に新堤築造請願が許可され、永忠の差配により藩営・工期三年で新池塘が完成した。

その結果、前ページの航空写真・地図のような長径約九百 m 、幅約二百 m の大ヶ池ができたため、山陽道は熊山南麓と大ヶ池北岸の間のごく狭い地区を通過することになった。そして岡山藩は幕末まで大ヶ池の北岸、南岸の地区の開発を禁じていた。右下の地図は明治二十八年測図の五万分の一地形図であるが、当時まだ池の北岸に国道二号線が一本伸びているだけで、そのほかは北岸南岸とも森林であった。要するに大ヶ池の移設はこの地区を隘路とするためのものでもあった。

なお大ヶ池移設に関する蕃山と永忠の関与については、花岡志郎氏の「大ヶ池史」によっている。

⑤ 蕃山の知行地

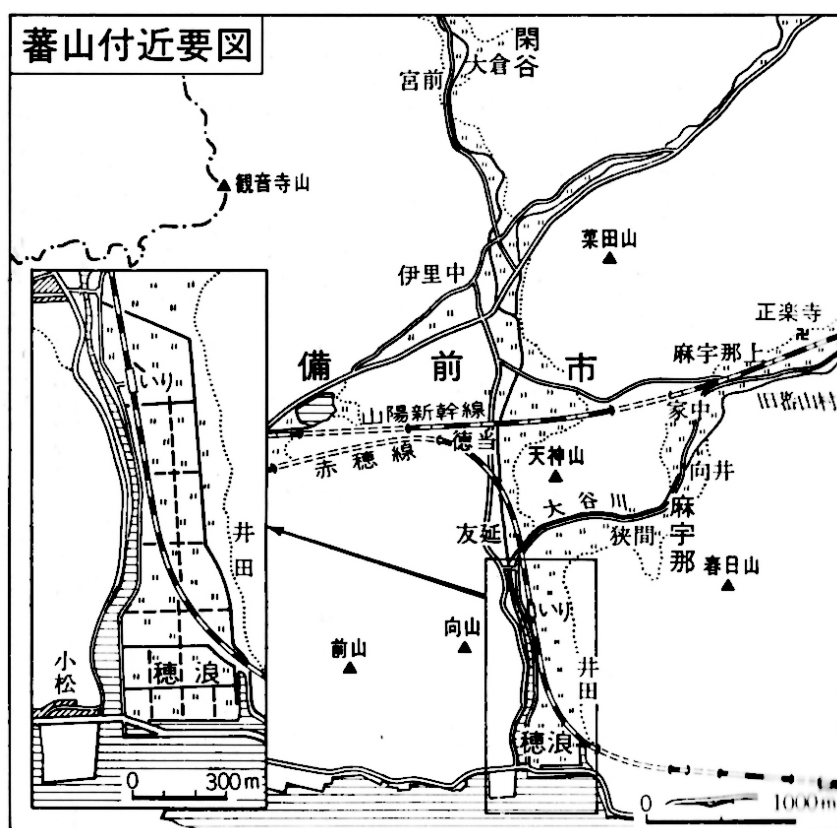
さて備前東部籠城戦略の発案者の蕃山が一六五〇年三千石の鉄砲組番頭に取り立てられたことについては既に述べたとおりであるが、そのとき与えられた知行地は和気郡の寺口村（改称して蕃山（しげやま）村）と八塔寺村で、いずれも播磨に対向する位置にあり、この時期光政と蕃山は東向きの備えを重視していたことが分かる。

- 一、まず八塔寺村から観察することとする。八塔寺村は備前市吉永の東北方約十五 km にある山村で、蕃山はここに屯田兵を置いた。このことについて十八世紀中葉に岡山藩士湯浅常山が書いた武将たちの逸話集「常山紀談二十五卷」の中に「和気郡八塔寺は、備前・美作・播磨犬牙の如く入交じりたる地にて、そこに蕃山は田を開き、士数十人を土着させた」という主旨のことを書いており、関が原から半世紀の後には武士を屯田させることは相当珍しいことであったようだ。また当時備前・美作・播磨三国の接点である八塔寺村が軍事上の要点と誰からも認められていたということである。

- 二、蕃山のもう一つの知行地・蕃山村

の経営については、既に前章の中で蕃山が三千石番頭に課されていた装備定数の数倍分の鉄砲などを準備していたことを述べている。ここでは蕃山村が戦略上の要点であったことに触れたい。

一六四五年までは隣国播州赤穂の藩主は光政の叔父の池田輝興であったので、和気郡は「他国の手先」の郡には相当せず、家老陣屋は置かれていなかった。それが先に述べたように赤穂池田家を取り潰され、その後に入った浅野家が早々に城を築き始めた。そのような状況下で三千石番頭に取立てられた蕃山に知行地として和気郡寺口村が割り当てられた。同地にある正楽寺の門前の村ということで寺口村と呼ば



れていたが、仏教嫌いの蕃山は光政に願って蕃山（しげやま）村と改称してもらった。

この蕃山村は、播磨から備前に迫る三本の経路のうち山陽道（船坂峠）を除く二本の経路の集約点である。一本は帆坂峠から蕃山村に至る谷沿いの経路で、現在山陽新幹線が通っている。もう一本は赤穂―福浦村―寒河村―蕃山村の谷間の経路で、岡山藩はこの経路からの侵攻を相当警戒していたらしく、寒河村―蕃山村間に道路を造ることを禁じていたようだ。日生町誌によると寒河村から西に行く場合には南に大回りして中日生に至り、そこから車馬も通れぬ狭い道を北上してオノ峠を越えて蕃山村に下っていた。なおこの当時日生村から西に行き井田村、難田村に通じる道はなかった。

以上のように当時の道路状況から見て蕃山村が備前東部の要点であり、また道路網の構成にも藩の細心の注意が払われていたということである。

⑥ 蕃山の備前退去

君臣水魚の交わりと謳われ、光政の絶大な信任を得ていた蕃山であったが、一六五七年和気郡蕃山村に隠退し、次いで一六六一年には備前を退去して京都に上った。この隠退の理由については昔からいろいろと論じられてきた。

第一は、蕃山自身が、「四十前後切々病出し、その上に山より落ち、右の肘をいため候えば、口強き馬にのられず、弓ひかれず、槍も不自由に候えば武士のつとめこれまでなり」と書いて隠居致し候」（熊沢蕃山全集）と述べている。

第二は、陽明学特に蕃山に対する幕府の圧迫に光政が屈し蕃山を手放したとする説、この説も昔から広く流布している。

第三は、蕃山・家老対立説である。この対立については一六五五年十二月の「光政日記」に記されている。

第四は、光政・蕃山対立説で、君臣水魚の交わりもある時期から光政が藩主としての自己の歩むべき道を新たに自覚した結果、蕃山との溝が徐々に広がり、蕃山はそれに絶望感を抱いて隠居し、やがて岡山を離れたという説である。谷口澄夫氏、尾藤正英氏ともこの説を採っている。これに関しては一六六八年ごろ光政が綱政にあてた書簡の中で蕃山を評して「高慢人にすぐれ、我思う事ほどよきはなきと思うにより人の言を一円聞き入れず」（池田光政公伝下巻）と書いている。

第五として、ここに「備前東部籠城戦略の着手時期をめぐる光政と蕃山の対立」説を新しく提起する。それは光政と蕃山の間であれほど意気投合した備前東部籠城戦略であったが、蕃山が光政にその早期着手をいくら促しても受け入れてもらえず、そこで蕃山村に隠棲して現地から養子の政倫（光政の三男）を通じて種々献策してみたがこれも受容れられず、絶望して藩外に退去したというものである。（これに関し書き残されたものは何もない）これ以降光政は、蕃山の口から備前東部籠城戦略が漏れることを極度に恐れることとなった。その後京都で心学を講じていた蕃山は、京都所司代により吉野に追放されたが、その背後に光政がいたと考えられる。

以上で第一章を終る。

第二章 備前東部籠城戦略の本格準備

第一節 籠城準備の本格着手

①千姫の卒去がきっかけ

前章で述べたように一六五〇年頃光政と蕃山が共鳴しあった備前東部籠城戦略であったが、その後蕃山がその準備に着手するよういくら促しても動かない光政であった。しかし一六六六年二月六日天樹院（千姫）が亡くなると備前東部籠城戦略関連の諸施策が堰を切ったように動き出した。

この年二月光政は江戸にいたが、江戸に同行していた津田永忠に輝政・利隆の墳墓の地の調査を命じ、急ぎ帰国させた。同年五月岡山に帰着した光政は、すぐに領内の淫祠を壊させ、寄宮を造るよう申し付けた。またキリシタンの宗門改め・神道請を命じた。八月には寺院淘汰・僧侶還俗を命じた。十月光政自ら備前東部に足を運び、木谷村を見分して閑谷学校の縄張りを命じ、脇谷を見分して和意谷墓所を決めた。翌一六六七年岡山を発って東勤、一六六八年五月帰国するや一二三ヵ所の郡中手習所の設置を命じた。

一六七〇年二月には、一六六二年に干拓を始めた友延新田に井田（せいでん）の地割をすべく永忠に命じた。なお池田家の諸文書で一六七九年二月着工とされている倉安川の準備工事（実質的な着工）についても一六六六年頃命じたのではないかと考えている。

この天樹院（千姫）の卒去とともに一挙に発せられた諸政策について、その理由をうかがわせる記録は一切残されていないが、次の二点ではないかと考えられる。

- 天樹院の生存中は徳川から攻められる心配はない。卒去後は徳川に攻められることも十分考えられる。
- 天樹院の生存中に備前東部籠城準備に着手してそれが露見した場合、恩義のある義母に多大の迷惑をかける。

②光政の神経性下痢

一六六七年四月光政が天樹院卒去後初めて東勤して江戸城に登ったところ、幕閣各位の光政に対する態度が急に冷たくなっていて光政は危機を感じた。そして五月初旬から吐瀉・腹痛がやまず、岡山の侍医を呼び寄せるなどいろいろ手を尽くしたがなかなかよくなり、八月中旬江戸を発って伊豆伊東の温泉に転地療養をした。その後三島、江ノ島、鎌倉など遊覧の後九月八日江戸屋敷に帰った。

この長期にわたる吐瀉・腹痛は、いわゆる神経性下痢と思われる。これについては光政の苛烈な寺院潰しに対する寺院側の上野寛永寺などを通じての幕閣への上訴反撃が原因との説がある。また民間では仏罰が当たったと噂していたとのことである。（岡山大学名誉教授水野恭一郎氏「備前藩における神職請制度について」より）

しかし私はそれに加えて、幕府の陽明学に対するいっそうの猜疑の目を光政が感じ取っていたこと、またこの時期幕府巡見使が岡山藩に至っており、巡見使に備前東部籠城戦略が暴露することを危惧したためではないかと思っている。

③光政と幕閣との関係

幕府が光政に冷たく当たった原因を考えてみると、一つは天樹院の生存中同女を後ろ盾にした光政の態度が大きいと見ていたことの反動と思われるが、特に次の数項目について幕閣は常々面白く思っていなかったようである。

一つは、岡山藩の活発な新田開発、これは藩の富強化につながるものである。また備前・備中の国境や浅口郡での開墾は隣藩との争いになっていた。

二つ目は、光政が一条家と縁組を結び、参勤交代の行き帰りに京都の公家衆と交わっていたこと、これは幕府にとって面白いことではなかった。

三つ目は、岡山に蕃山を呼んで陽明学を講じさせたところ、全国から浪人が集まってきた。これに対して幕府は相当の警戒心を持っていた。これが次の項につながる。

四つ目は、別木（べっき）事件との関連である。一六五一年七月江戸と駿府で由井正雪を首魁とする浪人一党の乱があったが、その翌一六五二年九月江戸で別木庄左衛門一党の陰謀が露見したとき、光政にも謀叛心があるとの風説が流れ、幕閣から綱政と光政の弟の池田恒元（播磨宍粟藩主）が呼ばれて訓戒を受けている。

五つ目は、軍備の充実。光政は治にいて乱を忘れず、軍制、動員、攻防など有事に備える計画を立てるとともに大規模な狩猟を繰り返していた。この狩猟が中央で問題となったことについては既に述べたところである。

これらの上に前年からの大規模な社寺の淘汰や多数の手習所の一挙の設置など幕府の予期しない藩の政策が次々と登場して幕閣をいらだたせていた。

以下この時期に開始された四大作事すなわち和意谷墓所、閑谷学校、井田及び倉安川の戦略的な意義の観察に移る。

第二節 和意谷墓所

① 和意谷墓所の立地に関する謎

口絵第一の絵図「和意谷墓所」は、池田家文庫にあるものである。和意谷墓所は、片上湾から井田に上陸し、約五里北上して関谷学校に至り、そこから約十里和意谷川沿いに北上したところにある。この立地については昔から謎とされてきた。

- 一、なぜ岡山から十里（四十里）も離れたところに造ったか。
- 二、なぜ旧山陽道からV字谷を二里（八里）も入った山の中なのか。
- 三、なぜ谷筋から山奥へ半里（二里）も登った山頂に造ったか。（海拔三五〇里＝谷から山頂までの標高差二三〇里）
- 四、なぜ五つの「お山」が山頂に広く展開しているのか。

ここで各「お山」を紹介すると、「一のお山」は光政の祖父にあたる藩祖池田輝政の墓、「二のお山」は光政の父の池田利隆夫妻の墓、「三のお山」は池田光政夫妻の墓である。この絵図にない「四のお山」と「五のお山」は幕末に近い岡山藩主の池田慶政と池田茂政の墓で、明治になって加えられたものである。その関係で昔「四のお山」「五のお山」と呼ばれていたものが「六のお山」「七のお山」に改称された。「六のお山」には光政の叔父、弟、甥などの墓があり、「七のお山」には輝政の庶子、利隆の庶子、光政の庶女（名前は六）の墓がある。

そして疑問点の最後は、その「七のお山」だけがなぜ他の「お山」から五百里も離れているのかという点である。なおこの「七のお山」と他の「お山」との間に深い谷があるので、下り分と上り分の高低差の計は八十里にもなる。これは曹源寺の正覚谷墓所の綱政以降の墓のまとまりぶりと比べると異常に見える。

② 巨大な墓石の運搬

下の写真は「一のお山」の参議輝政の墓で、碑石は高さ二・七里、幅〇・八里、厚さ〇・五里であり、それを載せる亀趺（きふ）は首尾二・七里、幅〇・八里、厚さ〇・五里である。なおこれらを瀬戸内海の犬島で切り出したときの荒取り石の大きさについては、碑になる棹石は長さ三・六里、幅一・一里、厚さ〇・八里で、亀石用は長さ三里、幅一・七里、厚さは頭で一・四里であった。これらを船で今の西片上に運び、そこから和意谷まで運搬した。

③ 表向きの報告と本当の狙い

なぜ辺鄙な山奥の山頂に墓所を設けたかについて、私は和意谷までの道路造りが主眼であったと考えている。



幕府に対しては、「和意谷を墓所を選んだ」→「片上港から和意谷まで巨大な墓石を運ばなければならない」→「そのため片上港から和意谷まで約十五里の間に重量物の通過に耐えうる道路を作らなければならない」と報告して了解を取り付けたはずである。

しかし光政の本心は、有事備前東部に籠城する際には天候にかかわらず重量物を連続的に運搬できる南北を貫く機動路が必要であり、そのため表向きには和意谷に墓所を設けるためとして片上港から和意谷に至る道路を造ろうとしたのである。

④「七のお山」の戦術的意義

前項の狙いをもっと詳しく述べると、有事備前東部に籠城して東からの又は西からの侵攻軍と戦おうとする岡山藩にとって、播磨又は美作から八塔寺川沿いに南下する敵はわが脇腹に迫るものであり、決して突進を許してはならない。この経路からの敵の南下を阻止するための要点が「七のお山」を含む標高三二六・七の高地であり、有事にはこの高地まで築城資材、武器・弾薬、糧秣・薪炭などを運搬してここに陣地を築かねばならないということである。そのための片上湾から「七のお山」までの道路造り、これが和意谷墓所造営の真の狙いであつたのである。

永忠の「奉公書」によれば、永忠は一六六五年二月光政から輝政・利隆の墓所の適地の探索を命じられて備前東部の山地を諸所踏破しているが、そのときの探索の要件は次の二つであつたと推定している。

- 一、 八塔寺川沿いに南下する敵を阻止することができる高地を探すこと
- 二、 その高地まで重量物を運び上げるための荷車用石敷道の敷設が可能であること

私はこの二つの要件を叶える地形を地図及び航空写真で調べたが、この和意谷敦土（あづち）山が唯一無二であつた。

⑤和意谷墓所に関する異説

光政がここに墓所を選んだことに関して「吉永町史・通史編Ⅱ」には大略次のように書かれている。

「光政がなぜ和気郡脇谷村の敦土山を墓所を選んだかは明らかではないが、山頂から東に向かうと池田家ゆかりの播磨の山並みが遠望できる。祖父輝政、父利隆の旧領の播磨。光政の強い望郷の気持ちがこの敦土山を選ばせたのかも知れない。」

しかしこの墓所造営には銀二百八貫（約七八〇千円）、賦役は延べ十万人と莫大な費用がかかっている。その大半は和意谷川のV字谷の堅固な谷壁を穿っての道路造りに費やされたと考えられる。当時の藩財政の細部は不明ながら決して余裕があつたとは思えない。その



ようなときに光政が感傷でもってかかる大出費を要する普請を行なうはずがない。光政の治に居て乱を忘れずの強い意志が実行させた作事に違いない。

第三節 閑谷学校

①閑谷の戦略的位置

閑谷は、備前東部円陣の中心にある。東からの敵の侵攻を備前・播磨国境の各峠で支えるときにも、西からの侵攻を吉井川―熊山の線で支えるときにも、閑谷はその要の位置にある。

備前東部円陣の内部機動路について見てみると、東西方向では山陽道（現国道二号線沿い）と旧山陽道（現

J R山陽本線沿い）の二本があり、閑谷はその両道にほぼ等距離にある。また前節の和意谷墓所で述べた片上湾から和意谷に至る南北の機動路においても閑谷はその軸の中間にある。また当時は閑谷から東の山中に入り鏡石神社を通って山陽道の八木山へ出る荷車道が整備されていた。

またこの閑谷村は、四囲を堅固な山地に囲まれていて最終的な防御地区としても最適の地である。以上のような諸点から閑谷が備前



東部籠城戦略の中核たる要点といえる。

②閑谷学校の軍事的側面

閑谷学校そのものの軍事的側面については次のように見ている。

- 一、 **備前東部籠城軍の司令部**。多人数を収容できる諸施設が存在し、また臨時の小屋・馬屋を建てるのに十分な地積もあって、備前東部に籠城する岡山藩にとって司令部になりうるものである。
- 二、 **有事に必要な物資の集積基地**。常時多くの学生を抱えており、また恒常的に諸施設の補修が必要な学校の場合、



有事に必要な諸物資（糧秣、薪炭、材木など）を集積していても幕府から怪しまれることはない。

なお当時閑谷学校には火薬・弾丸類も集積されていたもようである。郷土史家の岡本明郎

氏は「閑谷学校研究第一〇号」の中で、大講堂の西側の現在「文庫」と呼ばれている建物はその構造からして「火薬庫」であったと述べているが、野戦特科（砲兵）職種であった私も同様に見ている。また「文庫」の西側にある「火除山」は、従来その西側の学房の火災が大講堂側に類焼するのを防ぐためのものと説明されてきたが、岡本氏は「真実は火薬庫の爆発から西側の学房の居住者を守るためのものであった」と述べている。

三、**最終的な防御陣地。**閑谷学校一帯は岡山藩の最終的な防御陣地として種々の工夫がなされていた。その一環として「氾濫作戦」が準備されていたが、それについては項を改めて説明する。

四、**軍事に関する研究機関。**岡本明郎氏は「閑谷学校研究第六号」に閑谷学校が大砲を購入してその実験を行い、また大砲を鑄造していたと推測するに足る痕跡を発見した旨書いている。

以上の諸点から閑谷学校は教育と軍事の両面を備えた施設であったと考えられる。

③氾濫作戦の準備＝二本荒手の池

氾濫作戦とは、谷筋を侵攻する敵に対してその上流にある溜池の堰を切って一挙に放水し、敵を押し流すとともに、その後方につながる川沿いの道床をすべて流してしまおうというものである。

現在も閑谷学校の東約五百メートルの黄葉亭から南に約百五十メートル坂を登ると「いちたに池」に出るが、この池には普段の水抜きのほかに有事に氾濫を起こすための水門がある。（この地方では水落しが二本ある溜池を「二本荒手の池」と呼んでいる）この「いちたに池」の氾濫用の水門を開くと池の全水量が谷を駆け下りて永忠の屋敷に突き当たる。永忠の屋敷はその激流に耐えられるように高石垣を二段に築き、その上に建てられて

いた。永忠屋敷の石垣に突き当たった激流は西に流れ下って 泮池に入り、それを溢れさせて来寇する敵を押し流す。しかし激流の一部は閑谷学校の台に突き当たって塀を越えようとする。それを防ぐために築いたのが閑谷学校独特の蒲鉾型の石塀であり、川の中の水制や当時の港湾の防波堤などと同じく波浪がそれを越えても崩れない構造になっている。

なお閑谷学校から南へ約一 里下ったところにある「中田池」も平時の水抜きとともに有事の水落しの遺構を持つ「二本荒手の池」である。この池はその後改修されて有事の水落としのための水門はなくなっているが、落した水を導く水路の遺構は規模も大きく、一見の価値がある。

（残念ながら平成二十三年の中田池大改修により有事の水落としのための水路の遺構は完全に姿を消した）

また閑谷学校の東の黄葉亭からさらに東へ約一 里上ったところにもかつて「切り池」と呼ばれた「二本荒手の池」があったが、その後の豪雨で決壊した由である。今もその池の土手の一部が残っている。「切り池」の俗称は、当時の住民が



有事に切り落とされるべき土手を持った池であることを知っていたとも考えられる。

③ 閑谷学校を行在所とする計画

時代は下って幕末、鳥羽・伏見の戦いの直前の慶応三年（一六六七）十二月岡山藩は、長州・薩摩側から「現今公武の間の事情が切迫していて何時大事に至るか計り難い。なりゆきによっては鳳輦（ほうれん・天皇の乗物）を貴藩へ供奉致すべし。貴藩にお差障りご依存などはないと思われるが」と尋ねられた。それに対して岡山藩側は「この儀わが藩の願うところなり。万一その期に至り候えば一藩死力を尽してご守護奉る」と答え、両者の間で、まさかのときには閑谷学校を行在所とする計画が立てられた。このことは当時他藩からも閑谷学校が防衛拠点の適地と認められていたことを示している。

⑤ 「軍事施設論は世界遺産指定運動に迷惑」か

「神聖な学問・教育の場に血なまぐさい軍事の話を持ち込むのははなはだ迷惑だ」と思う人もあるかも知れない。しかし学問が崇高で防衛は穢れたものとするのは、わが国の第二次世界大戦敗戦の後遺症である。国というものがあれば、そこには防衛という尊い行為が必須であるというのが古今東西の原理である。

ところでユネスコはこれまで世界文化遺産の指定に当たり軍事を認めて来なかったか。否、姫路城、二条城、首里城、今帰仁城、韓国の水原華城、いずれも軍事施設である。欧米に目を移しても世界文化遺産に指定された要塞や砲台は枚挙に暇がない。

もちろん閑谷学校は教育施設としての指定を目指すべきものである。その閑谷学校が有事防衛施設ともなりうる力を備えていたということは、その価値を高めこそすれ、それを損なうものではない。

第四節 井田（せいでん）

① 井田の法

「井田の法」というのは三千年前の中国に興った周の国（BC一〇二七～BC二四九）が採用していた土地制度のことである。周は一里四方の田を「井」の字の形の畝で九等分し、その九区画の中心の区画を公田とし、周りの八区画を私田としてそれぞれを八家族に与えた。八家族は公田を共同耕作してそこからの収穫を租税として国に収め、一方各私田での収穫は百畝自分のものにしてよい（徳取り）というのが「井田の法」である。周の建国から約七百年後に孟子がこれを理想的な土地制度として書き残した。それから二千年後「孟子」を勉強していた光政は、岡山藩内で「井田の法」の実験をしたのであった。

② 井田の造成

以下はおおむね池田家履歴略記からの引用である。光政は、一六六一年から片上湾の一面一友延の浅瀬を埋め立てて十町歩足らずの干拓地を造成した。一六七一年そこに九町歩（各区画一町歩）の井田の区割りをを行い、「井田の法」を適用した。しかしこの井田には大きな欠陥があった。すなわち防潮堤が低くかつ弱くて大潮の時には冠水し、暴風の波浪でたびたび破損した。また水田の排水状態が悪く常に湿田状態であった。

翌一六七二年光政は隠居して綱政が藩主になり、一六七五年綱政はこの井田からの上がり（公租）が極めて悪いことを理由に、井田の法適用からわずか四年後に徳取りであった私田を通例の年貢地としてしまった。

（年貢は五割から六割）光政はさぞ苦虫を噛み潰していたことと思われる。と言うのも岡山転封以来五十年間に千百町歩、没後十年間に二千五百町歩と膨大な新田開発がなされていたこの時代に、光政はこの九町歩の井田に特に強い関心を示していたからである。すなわち一六五七年新田用地一帯を自ら一覽、一六六三年在府中の光政は新田の目論見書を至急江戸に持参すべく国許に命じた。一六六六年天樹院卒去後帰藩するやこの新田を視察し、一六七〇年十二月永忠に井田地割を命じて翌春完成した。このように着工から十年かけて造った井田における「井田の法」がわずか四年で崩されてしまったということである。

③ 下井田の造成

光政の卒去から二年後の一六八四年、永忠は下井田（しもいた）の造成を始めた。これは光政にとって上井田の出来具合が当初の目論見から大きくずれたものであったため、永忠に造成を遺言していたものと思われる。



下井田は、今までの南北に細長い井田の南に隣接する正方形の井田である。なおこの時から今までの井田は上井田（かみいた）と呼ばれた。永忠は下井田の造成に当たり次の二点を重視している。その第一は、防潮のための十分な高さとし、強さを持つ堤を築いた。

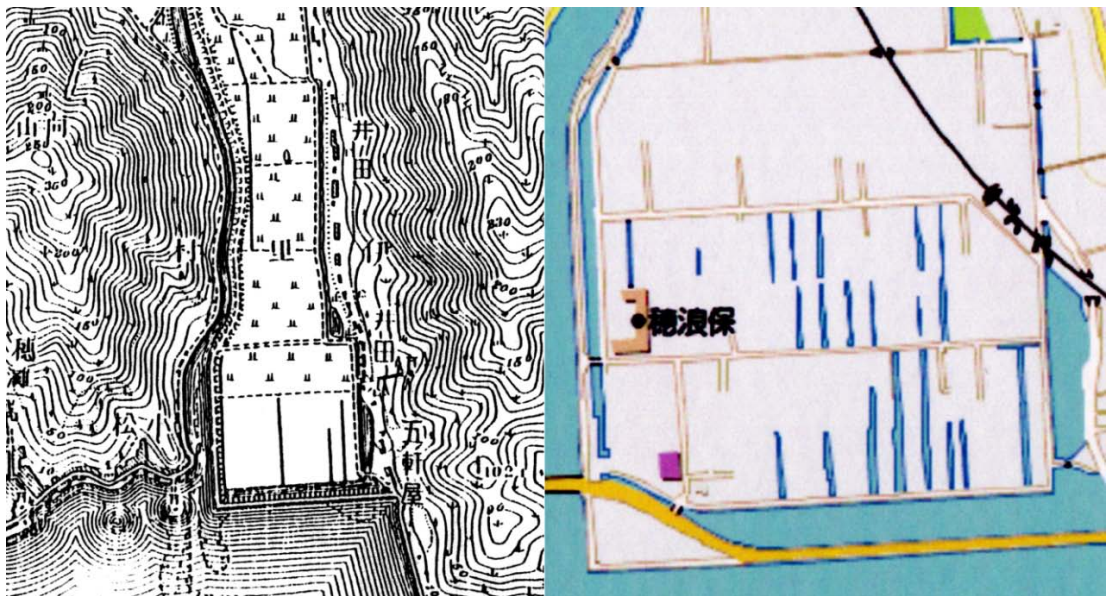
(現在も県道として大型自動車の通過に耐えている) また防潮堤を超えた波が直接下井田に上がらないように防潮堤と下井田の間に潮溜まりを作った。第二は、下井田を乾田—水を落とせばすぐ乾燥して地耐力のある広場になる—にした。そのために永忠は周辺から多量の土を運び込んで地盤を高くしたので、岡山藩の他の新田に比べて単位面積当たりでは数倍の費用がかかっているはずである。

そして四年後に下井田が完成して井田の法が適用され、周りの八区画の私田は徳取り一年貢免除—になった。なおこの私田も二十二年後には年貢地となっている。

次のページの地図の左側は、明治二十八年に測図された五万分の一地形図「片上」の部分であり、下井田の南三分の二は当時水田ではなく畑地になっている。右側は、現在の地図の下井田を拡大したものである。両者とも下井田の中に南北に伸びる黒い線青い線が認められるが、これは水抜きの溝である。これらの溝がいつ掘られたかは分からないが、そのうちの何本かは当初から掘られていたのではなかろうか。

一七一〇年の下井田の検地帳によれば、下井田九区画のそれぞれの格付けは、北の三区画は中田（反収一石二斗）と下田（同一石）、中の三区画は下田と下々田（同八斗）、南の三区画は印下々田（同六斗）となっており、当初から良田の造成をあきらめていたようだ。

これを永忠の水田造りの失敗と見るべきか。否、永忠は乾燥した埋立地の造成を企図していたと読み取るべきである。



④ 井田の真の狙いは埠頭建設

以上のような井田造成の経緯を観察していると、次の三つの疑問が湧いてくる。

- 一、 三千町歩余の開田に関与した光政がなぜ九町歩の開田に特別の関心を示したか。
- 二、 物成りが五割から六割という時代にわずか一割にしかならない「井田の法」を光政は本当に信じていたのか。（公田部分に廬舎（物置小屋）があるため公田の面積は全体の十割になる）
- 三、 上井田における「井田の法」は四年間で不成功と判定されたのに、綱政はなぜ下井田の造成を許したのであろうか。

これについては備前東部籠城戦略を持ち出さなければ説明がつかない。その前置きとして井田の戦略的位置を考えてみる。ここは備前東部籠城戦略の中核の閑谷から片上湾に出るのに最も近い湾岸だということである。（約十 町歩）このことは瀬戸内海と繋がる必要のある当戦略にとって重要な要件である。また播州赤穂方面からの侵攻を抑える要地・蕃山村へも約八 町歩と便利な地区である。地形的に見て片上湾は、一八九八年の米西戦争以来米国海軍が保持しているキューバのグアンタナモ湾よりも、日露戦争の焦点であった旅順湾よりも守りやすい港湾であったと見ている。

光政の本当の狙いは、有事井田に埠頭の役割をさせることにあったのである。すなわち有事片上湾に入っ

てきた増援の友藩の船を横付けできるような防潮堤を作って船載の軍需物資の陸揚げを容易にし、その物資を仕分けて集積することが容易なように乾燥した大広場を整備し、そこに搬入搬出の荷車の反復通過に耐える幅広い道路を縦横に整備するということを井田という形で整えようとしたのである。このように考えれば先の三つの疑問が氷解する。

光政は、年間を通じて湿田状態の上井田を見て失敗作と悟ったが、禁裏造営やたびたびの洪水のため火の車の藩財政を眼前にして、隠居の身ではすぐには下井田の造成を言い出せなかった。しかし最期まで備前東部籠城戦略の完成を希求し続けていた光政は、遺言で永忠に下井田の造成を命じ、綱政も亡父の遺志を無視できなかったのである。

⑤ 井田に関する後世の解釈

井田を造った目的について池田家履歴略記は、

「烈公いにしへを慕ひ給へば一として古典にしたがはせ給はざる事なく、然るに租税溝域もろこし三代の法すたれその形だに知る人なきをうれへ給ひてこの新田を井田とし給ふべく思しめし、寛文十年（一六七〇）十二月十一日井田の地割すべき旨津田重次郎に仰せありて…」

と書いている。

池田家履歴略記は、岡山藩士斎藤一興（一七五八—一八二三）が井田の完成から約百年後に書いたもので、右記の引用は井田に関する斎藤一興ら当時の岡山藩の解釈である。そしてこれがその後の「歴史」になっている。

⑥ 山田方谷の観察

井田の完成から約二百年後の一八七六年（明治九年）、井田（いた）村民が井田を開いた恩人の光政の遺徳をしのんで建立した「井田碑」が今も上井田の中心に建っている。その碑には閑谷学校を再興して「閑谷精舎」とし子弟の教育に専念した山田方谷の撰文が刻まれているが、その中に「学田を作ったことに意義があり、井田の形の模倣にそれほどの意味はない」旨のことが書かれている。



備前市歴史民族資料館の平成十四年度紀要「井田—閑谷学校田」からその部分の口語訳を引用する。

「干拓して土地を開き、井田を作るのは、たまたま学校のための田を経営するときに、中国の古法を模倣したに過ぎない。さもないと、このような取るに足らない二つの井田を片田舎に仕切っても、のちの世まで行われること

はない。単に昔の事物を好む者に見せるだけのものになってしまう。光政公の知恵で、このような無用に見える企てがなされるわけがない。」

陽明学者と言われ、偉大なる政治家・財政家であった方谷の目は、古法の復元などは無意味と見ている。

⑦ 幕末の長州広島両藩の片上湾仮泊

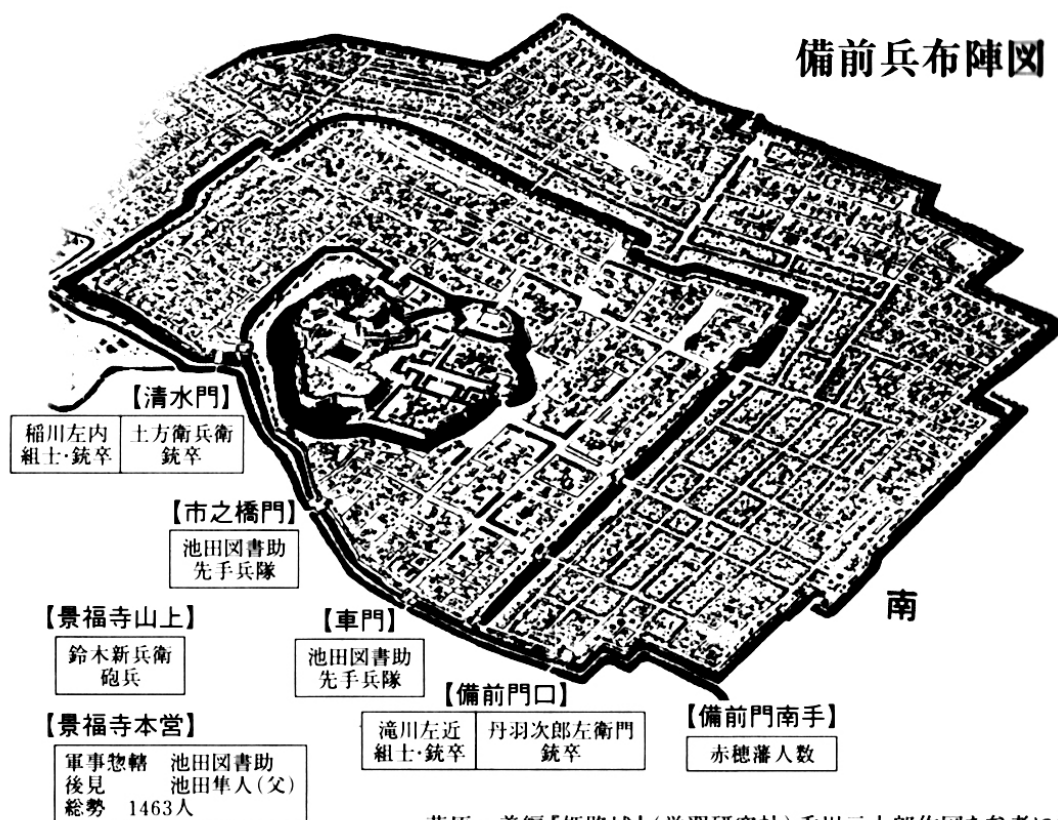
ここで幕末の一八六八年一月十五日から旬日長州藩及び広島藩の兵員を乗せた船が片上湾に仮泊していたことに触れたい。前年十月大政奉還、十二月九日王政復古の号令、この年一月三日鳥羽・伏見の戦。岡山藩は、新政府から摂津西宮の警備を命じられて東進中の一月十一日「神戸事件」を引き起こした。また同日新政府は姫路討伐令を発し、岡山藩はそれを受けて姫路城の開城を迫っていた。

そのような状況下の一月十五日、長州兵千五百四十人が三隻の蒸気船に分乗して片上湾に入り、片上に上陸してしばらく逗留することを告げた。また十七日には片上湾岸の難田（なだ）村（井田の西側の村＝現備前市穂浪）の沖に突然四隻の蒸気船が現れた。これは長州・広島両藩の各二隻で、前者は長州兵三百十人中二百五十人を片上へ送って先着兵と合流させ、あと六十人を難田村へ泊らせた。後者の広島兵五百五十人は難田村に上陸し、二つの寺のほか民家三十八軒へ分宿した。なお十六日晚岡山の京橋では広島藩の船十五隻から千三百人に上る大部隊が上陸して直ちに陸路を東進し始め、十七日晚には山陽道の藤井に着いてそこへ泊ったが、翌日には難田村へ呼び寄せられた。

そして新たに同型船三隻を加えた広島藩は、一月二十一日片上湾を出た。一方の長州藩は、兵員千七百九十人の出港準備として先の蒸気船二隻に加え手漕ぎの船七十隻を片上港に用意した。そして二十五日片上湾を出て行った。以上は和気郡史通史編下巻Ⅰによっている。

この長州・広島両藩の大部隊の片上湾集結は姫路討伐令を受けてのものと思われるが、この集結に先んじて岡山藩によって姫路城の無血開城の道筋が付けられていた。これがもし遅れていて長州藩が前面に出ていたならば、第一次征長以来幕府に屈服し辛酸をなめて来た長州藩士が強硬な武力開城の道を選んでいても十分考えられる。そのとき悪くすれば世界遺産白鷺城の炎上もあったかも知れない。（藤原龍雄氏「姫路城開城—譜代姫路藩の明治維新」を参考にした。なお下の図は備前藩が姫路城を攻囲したときのもの）

以上引用が長くなったが、ここで述べたいことは次の二点、一つは前節閑谷学校の最後で「閑谷学校を行在所とする計画」に触れたが、薩長のその計画にはこの片上湾の活用も当然含まれていたものと考えられる。もう一つは難田村に広島藩・長州藩の兵員千九百十人を入れているが、その際隣接する井田が活用されたものと考えている。



萩原一義編「姫路城」(学習研究社) 香川元太郎作図を参考に作成

そうであれば、これは二百年前の光政と永忠が企図していた〈井田の用法〉に合致したものと言うことができる。

第五節 倉安川

① 倉安川とは

冒頭で一六八〇年早春、鹿久居島と和意谷での鹿狩を終えた光政と綱政がそれぞれ和気村から舟で吉井川を下り、前年完成したばかりの倉安川を通過して岡山城に帰ったことを述べた。

倉安川（くらやすがわ）とは、吉井川下流の岡山市吉井に設けた水門から水を引き、南西に流れて一時砂川に合流し、それから分かれて西流して百間川を横切り、旭川の沖積地に新しく開発された三百町歩の倉田新田を灌漑するとともに、さらに西流して旭川に抜ける用水路兼運河である。

② 倉安川の戦略的意義

なぜ光政は旭川に近い倉田新田に遠い吉井川から用水路を引いたのであろうか。この問題は光政の備前東部籠城戦略抜きでは説明がつかない。それは灌漑用水の問題ではなく、光政が有事岡山から備前東部地区に大量の装備、糧秣、築城資材などを迅速に運ぶためには旭川と吉井川を結ぶ運河が必須と考えたからである。当時の道路や馬の素質を考えると物資輸送、特に大砲などの重量物の運搬には馬よりも舟のほうが格段に有利である。なお「倉安川」の名称は、物資を馬の鞍で運ぶよりも舟のほうがずっと安いということで付けられた由である。

さて舟による場合、仮に岡山城から和気村まで行くとして、倉安川経由であれば約三十五里。これがなければ旭川を下って児島湾に出て、海上を約六里東航し、吉井川をさかのぼって合計約四十五里である。この約十里の差もさながら、海上の通過は風波、潮流などの影響を受けやすく、また敵の船艇の妨害を受ける恐れもある。一方倉安川通過の場合自然条件の影響も敵の妨害もほとんど考えなくてよい。また本論の冒頭で述べたように五本の綱を持つ領民を岸沿いに走らせれば約二十里を二時間程度で通過できる。倉安川の打通こそは、光政の備前東部籠城戦略にとって最も待ち焦がれていたものと言えよう。

③ 倉安川は半年で出来たか

池田家文庫の「津田永忠奉公書」「留帳」「履歴略記」のいずれも「倉安川は一六七九年二月に着工し、同年八月に完工した」旨書かれている。しかし総延長約二十里、幅七～九間の水路がいに岡山藩の土木工事の能力が強大であったとしても半年で完工したとは不思議である。

この不思議に辻褄を合わせた論文として一九五三年の「吉備地方史七号」に掲載された水野恭一郎氏の「備前国倉田・倉富・倉益新田の開発と倉安川の打通」がある。水野氏は、池田家文庫の中の「奥上道郡口上道郡舟通溝ノ絵図」（以下「舟通溝ノ絵図」と略称）に添えられた書付の中に

「倉安川九〇〇八間（約十六・四間）、**新堀**一三二四間（約二・四間）」

と書かれているのを見て、

「この**新堀**だけが全く新たに切り開いたものであって、倉安川の新堀以外の部分は**従来からあった用水路や小川などを利用し**、これと新堀を相互に連結しつつ、一貫した川筋として貫通せしめたものである」としている。

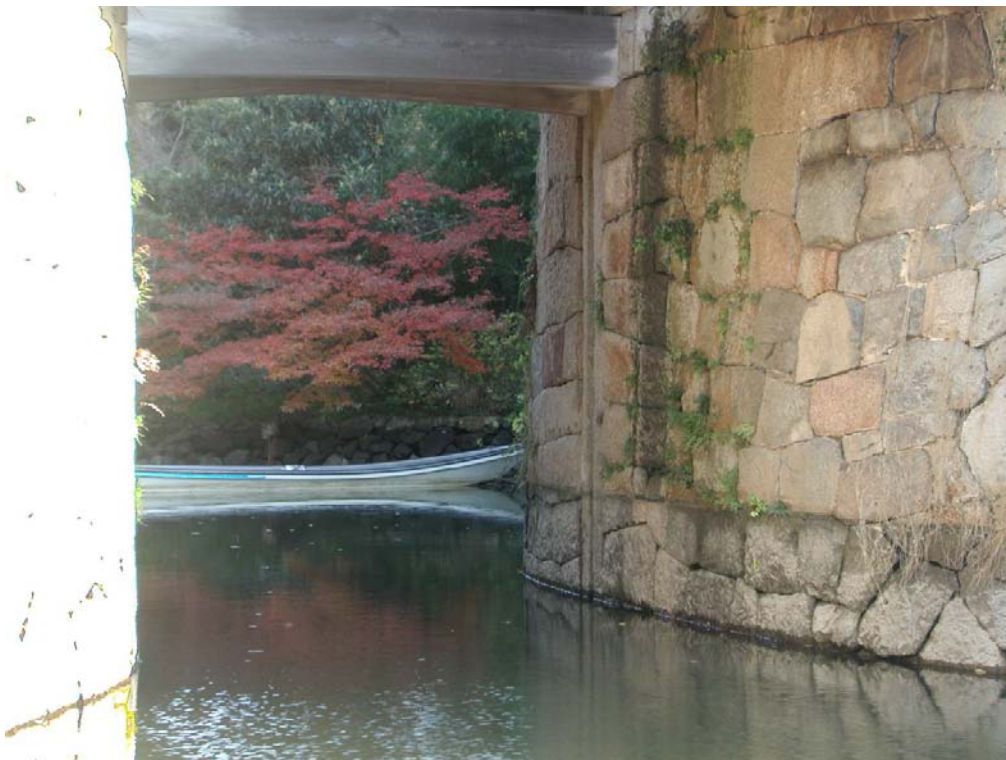
そこで水野氏が根拠とした舟通溝ノ絵図（口絵第二）を観察しよう。倉安川は、右上の吉井村の水門から西南方向に長い青色の水路と短い黄色の水路が交互に連なって左下の旭川まで繋がっている。この絵図の黄色の五箇所が絵図に添えられた書付の中の**新堀**に相当し、一六七九年二月から八月の間に掘削されたものと見る点では水野氏の見解に同意したい。しかし青色の各部分については、水野氏の言う「従来からあった用水路や小川などを利用した」ものではなく、岡山藩が寛文年間から一連の用水路兼運河（倉安川）開削構想の部分として計画的に掘り進めてきた四本の水路であったと見ている。以下そのことについて吉井水門から

広谷村までの間と松崎村から旭川までの間に分けて説明する。

④ 吉井水門から広谷村までの新用水

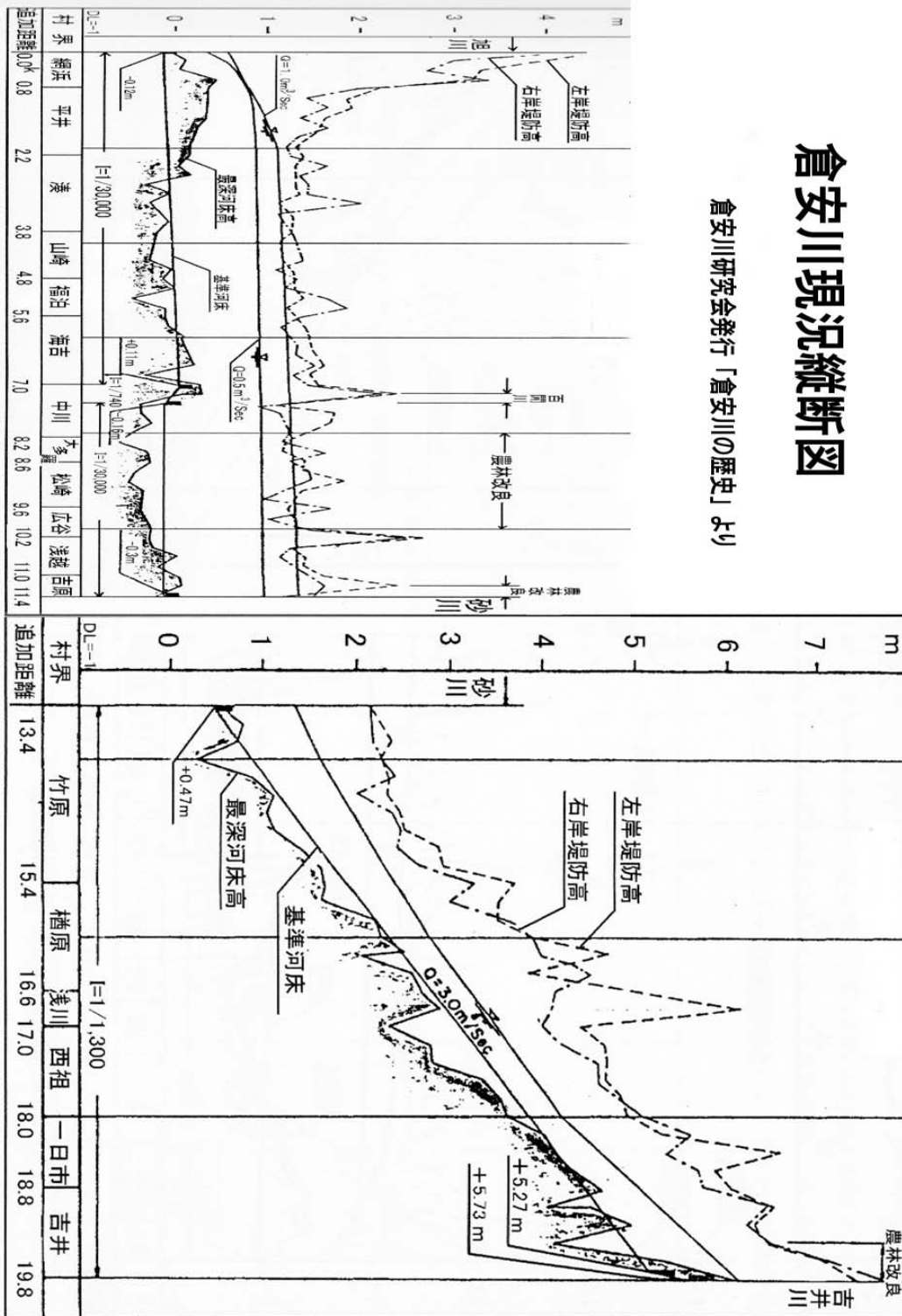
次の諸点からこの区間の水路は寛文年間（光政の藩主時代）から計画的に造成されてきたものと考えられる。

- 一、 一六六一年ごろの「上東郡絵図」に吉井付近から取水するための「井セキ三百間」が吉井川に書かれており、倉安川の構想は相当早くからあったようだ。
- 二、 舟通溝ノ絵図の吉井村に書かれている二つの水門は、現存する堅牢な石組みの高瀬廻し＝運河用の閘門であり、この遺構を見ると到底六ヶ月で出来るようなものではなく、一六七九年二月には既に完成していた。



倉安川現況縦断面図

倉安川研究会発行「倉安川の歴史」より

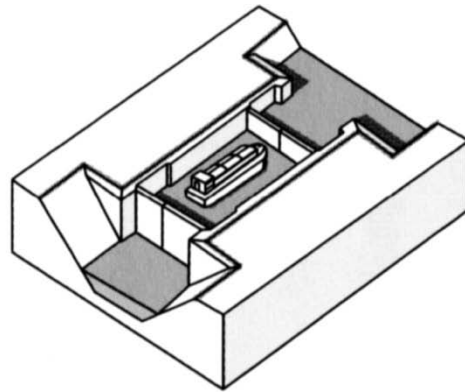


なお吉井水門の能力については次項で検討する。

- 三、同絵図の青色の流れは一定の幅で描かれており、人工の水路と認められる
 - 四、同絵図で新用水は浦間悪水抜きと立体交差しているが、自然河川が立体交差することはない。
 - 五、八十三頁の「倉安川現況縦断面図」（倉安川研究会発行「倉安川の歴史」から引用）を見ると新用水の河床の傾斜は等斉（千三百分の一の傾斜）であり、よく設計された人工の水路と認められる。
 - 六、新用水と砂川との合流区間について、「上道町史」によると次のような経緯がある。
- (ア) 新用水の工事に着手したときには、舟通溝ノ絵図の浦間悪水抜きの流れ（現秋芳川）が当時の砂川であった。新用水はこれを立体交差で超えて以後おおむね今の砂川の線を南下する予定であった。

(イ) 一六七三・一六七四両年、旧砂川がたびたび氾濫したため、新用水の計画は浦間悪水抜きを越えたところで一時中断し、旧砂川を現在の位置に移す大改修を行った。

(ウ) そのため新用水の計画は大幅に変更され、堀内村から吉原村までの約一・七^里の区間で新砂川と合流することとなった。なおこのときの砂川の改修工事も新用水の工事も藩営であったことが池田家文庫の「留帳」の出費記録からうかがえる。



① 下流水門を閉じて、
上流水門注水口を開けて
水位を上げる



② イタリア・バトヴァのブレント川のボンドロック

⑤ 吉井水門の評価

吉井水門は、水位の高い吉井川と水位の低い倉安川の間に二つの水門に挟まれた「舟溜り」＝閘室を設け、両側の水門の開閉により水位を調節して高瀬舟を昇降するものである。

閘室には下図①の一度に一艘ずつ処理するものと、②の一度に数艘ずつ処理するものとの二種類があり、吉井水門は後者に属する。前者は注排水の量を極力少なくして操作時間を短くしようというものであり、後者は多数の舟を同時に昇降しようとするものである。有事緊急に多数の舟を処理するためには後者でなければならない。

ここで吉井水門の処理能力を検討する。その閘室は、両水門の距離四十六^尺、最大幅十八・五^尺の卵形をしており、その面積は五百七十^m²である。そのうち両水門に近い通路部分の面積が七十^m²で、残りの五百^m²が高瀬舟の収容区域である。標準的な高瀬舟は長さ五十尺、幅七尺であったから、五十尺×七尺はおおむね三十三^m²、それに操舟の余裕としてその五十%を加算すれば一艘当たりの所要面積は五十^m²となるので、吉井水門は一度に高瀬舟十艘の昇降が可能ということになる。

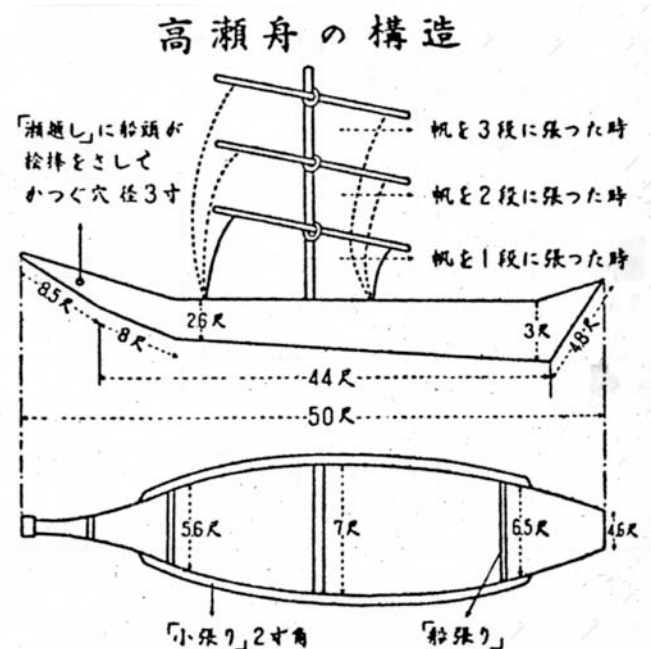
なお閘室内で舟回しをする場合には、五十尺強の長さの舟を回すため二百^m²の水面が必要となり、その際の閘室の収容力は六艘となる。しかし両水門の外側に旋回できる水面があり、閘室内での旋回の必要性は低い。

以上のような閘室の広さから見て、吉井水門は有事迅速に多数の高瀬舟を通過させるべく構築されたものと見ることができる。

⑥ 松崎村から旭川までの水路工事

この区間を舟通溝ノ絵図でみると、青色の部分が三区間（東・中・西）ある。この三区間の水路が一六七八年末までに藩営で整備されていたと推論した根拠について述べる。

一、（青色部分の水源に着目して）東の青色の区間は中川の東を南に流れる小川を東に折り曲げて松崎村まで開削したものであり、中の青色



の区間は中川の西を南に流れていた小川を南西に折り曲げて圓山村まで開削したものである。いずれも水源らしい水源を持たない水路であり、用水路とは言えないものである。

- 二、西の青色の区間は、旭川の東側を南流して平井村に至る祇園用水を途中分水して東の湊村まで送る用水路である。本来はこの祇園用水の分水により三百町歩程度の倉田新田の灌漑は十分可能なものである。ちなみに倉田新田の南に広がる後発の沖新田（千五百町歩）の西半分は、この祇園用水でまかなわれている。
- 三、三つの水路の共通点として、いずれも旧海岸線に平行するものであり自然河川ではない。各水路の底には傾斜がなく（八十三ページの「倉安川現況縦断図」参照のこと）東西どちらから水を入れても反対側に流れて行くように造られている。かつまた三区間の底面の高さは同一になっている。
- 四、各区間の水路のほぼ直線的な形状、共通する水路の幅と深さ、一部に認められる人工的な掘割の構造など。

以上の諸点から青色の三区間は、永忠が倉安川として接続することを腹藏して一元的に計画し施工した水路工事であったと考えられる。

⑦ 平井―網ノ浜間の延伸と旭川との水位差解消策

舟通溝ノ絵図には現在の倉安川の平井―網ノ浜間約一 里が書かれていない。池田家文庫の留帳によれば、平井水門の具合が当初から悪かったのでその年（一六七九）十二月に倉安川を網ノ浜まで延伸することにした由である。舟通溝ノ絵図によれば、平井では倉安川の水遊びと旭川の船尾（ふなお）の高低差が七尺（約二 呎）あったにもかかわらず閘門を作らず、水遊びと船尾の間に転（ころ）を使う滑り台が設けられていたらしい。

この平井水門の不具合は当初から分かっていたはずである。しかし光政はもし当初から倉安川を網ノ浜まで延伸して旭川の水がこの用水路に入りうることを幕府に報告した場合、吉井川からの導水の必要性を疑われ、運河が主目的ではないかと追及されることを恐れていたのではないかと推測している。

それはそれとして倉安川の平井の水遊びと旭川との水位差七尺は、旭川を平井から網ノ浜まで約一 里遡ったからといって水位差が何寸も解消されるものではない。そこで網ノ浜までの延伸工事と同時にあるいはそれに先んじて現在岡山県庁の東側にある「旭川新堰管理橋」の位置に高さ約七尺の井堰を設けて上流部の水位を上げるとともに淡水化を図り、その水を東中島と旭川東岸との間の派川に流し、それを網ノ浜の水門を通じて倉安川に導き、水位差七尺の解消を図ったようだ。これについての当時の記録は現在のところ認められないが、それについては当時この部分の作事に関係する一切の記録が恣意的に消去されたことが十分考えられる。

⑧ なぜ十年以上もかかったか

「津田永忠奉公書」の一六八〇年十月四日の記事に、

「故少将（隠居光政）様の御前へ召出され、重二郎（永忠）取立て候新田に初めて遊ばされ候と御意なされ、お鉄砲の雁を拝領つかまつるとともに、**新田新川大きなことと存じ立ち候に首尾つかまつると、**かたじけなき御意をこうむり候」

と書かれている。本節のこれまでの考察とこの光政の「新田新川大きなことと存じ立ち候に…」との感慨から、倉安川の工事は寛文年間（天樹院卒去直後か）に藩主光政が永忠に命じたものと思われ、それが十年余を要して一六七九年夏に完成したものとするのが妥当と思料する。

そこで倉安川の完成が遅くなった理由を考察すれば次のとおりである。

- 一、全長約二十 里という用水路の長さ、高瀬舟がすれ違うことができる四～五間（七～九 呎）の水路幅、舟の曳き手が走ることができる両土手舗（みち）、八基の大型水門、高瀬舟の邪魔にならない高さの多数の橋梁などの工事が必要であった。

- 二、特に奥上道郡では班田時代からの水田地帯を横切るものであり、既存の多数の小河川や用水と立体交差するための胴木や底樋が多数必要で、一方口上道郡の新田地帯では分水のため多くの樋門が必要であった。池田家文庫の「上道郡倉安川絵図」はずっと時代の下った一八五六年のものであるが、これには胴木が三ヶ所、底樋が二十五ヶ所、樋門が数十ヶ所あった様子が記されている。
- 三、一六七三・一六七四両年の大洪水の結果砂川の流路の付替えが必要となり、倉安川の工事が大幅に遅れた。
- 四、一六七三年、禁裏炎上後幕府から岡山藩にその造営を命じられ、六万五千両という莫大な出費を要した。それに前述の大洪水による藩収入の激減が重なり、当時藩財政が逼迫していた。

⑨ なぜ着工の報告を遅らせたか

倉安川完成の前年（一六七八）九月の津田重二郎手記によれば、永忠は光政から「御国中の新田、一度に公儀へ上げ候ように仰せ付けられた」とのことである。この一節の前後を読むと、光政・綱政はこの時期まで備中新田、和気新田、倉田新田のことを公儀（幕府）へ報告しておらず、近々倉安川のことも含めて同時に公儀へ上げる心算であったようだ。

光政は、倉安川の開削にあたり各パーツごとに秘密裏に準備しておき、最後の連結工事（舟通溝ノ絵図の黄色の部分の工事）着手の段階で他の諸々の新田と一緒に報告すれば、幕府から倉安川工事の差し止め命令を受ける公算が低くなると読んでいたものと思われる。



井上宏司氏による 倉安川舟運とセンダンのある風景想像絵図

終章

第一節 秘密裏に準備された諸準備

一六五〇年頃から始まり一六八二年の光政の卒去で閉じられた備前東部籠城戦略とそのための膨大な諸準備であるが、これらはすべて隠密裏になされ、三百数十年たった現在まで全体像を顕すことはなかった。それは秘密を保つためのきめこまかい努力の積み重ねがあったからで、以下その努力振りに注目しよう。

①儒教精神の具現と公称

- 一. 和意谷墓所における葬儀はすべて儒礼とし、儒教式の墳墓を築き、輝政の墓石は亀趺（きふ）に載せた。
- 二. 閑谷学校には孔子廟を設け、沔池（はんち）を掘るなど全般に儒学の殿堂にふさわしい雰囲気をかもし出している。
- 三. 友延新田には井田の区割りをを行い、「井田の法」を適用した。

現在も多くの人々がこれらを儒教精神の具現と信じているが、既に述べたとおり当時の藩財政に遊びごとをするほどの余裕はなかったというより、それは火の車であった。

②表向きは治水策・利水策とした

旭川の沖積地を干拓して造った三百町歩程度の倉田新田にわざわざ約二十里遠方の吉井川から用水（倉安川）を引いた。その後倉田新田の沖に千五百町歩の沖新田を干拓造成したが、その西半分の倉田新田に隣接する新田はすべて旭川からの用水でまかなわれており、倉田新田への吉井川からの利水は必須ではなかった。

香登村から伊部村に亘る長径約一里の大ヶ池は治水・利水のためのものであるが、あれだけ長くしたことについては隠された狙いがあったからである。

③幕府への報告を加減した

質銀事件の際、実際の現場であった日生諸島の中の大多府島（勘三郎洞）に代えて児島湾口の鳩島での事件として幕府に報告した。しかし光政自身一六五五年十二月晦日の日記に一味の者を虫明で捕らえて詮索したと書き残すミスを犯している。

倉安川については、工事が九割方完成してから幕府にその着工を報告した。それに符丁をあわせるため一六七八年以前の諸工事に関連する記録はほとんど残されていない。しかし一六七七年の池田家文庫の「留帳」の造築附符の中の奥上道郡の項から新用水（のちの倉安川の一部）が藩営の普請であったことが分かる。

④蕃山の監視と光政の致仕

離藩した蕃山の口から備前東部籠城戦略が漏れることを光政がおそれていたことについては、既に述べたところである。

光政は数え年六四歳で致仕した。健康上の理由からといわれているが、備前東部籠城戦略のもしもの漏洩を考えると藩主でいるよりも隠居のほうが藩のためによいと判断したものと思われる。



第二節 綱政の防衛構想の転換と永忠の遺志継承

一 綱政の防衛構想の転換

一六八二年五月隠居光政が亡くなって綱政が名実ともに藩主となり、幕府に対する岡山藩の態度はがらりと変わった。すなわち光政はキリシタンの神道請の推進や大老酒井忠清に対する建白書による忠告など、幕府に対しても自分の信ずるところを主張しそれを貫こうとした。その分幕閣との間に軋みを生じていた。

一方綱政は、幕政にはつとめて順応するという方針を採った。世間からは「追従」しているとも見られていた。綱政が毎日側用人柳沢吉保の屋敷に出向いていたことから「吉保の玄関番」と呼ばれていたとも伝えられている。谷口澄夫氏は、この転換を武断的色彩の濃い藩政から文治的な藩政に移ったと述べている。

綱政の代になって変わった点としては、

- キリシタンの神道請制度から寺請制度へ
- 淘汰された寺院の多くを復興
- 藩主の墓祭を儒式（和意谷）から仏式（曹源寺=岡山市中区）へ
- 手習所の廃止、藩校・閑谷学校の閉鎖論
- 地方（ちかた）配置の諸士の城下への引揚げ

などである。

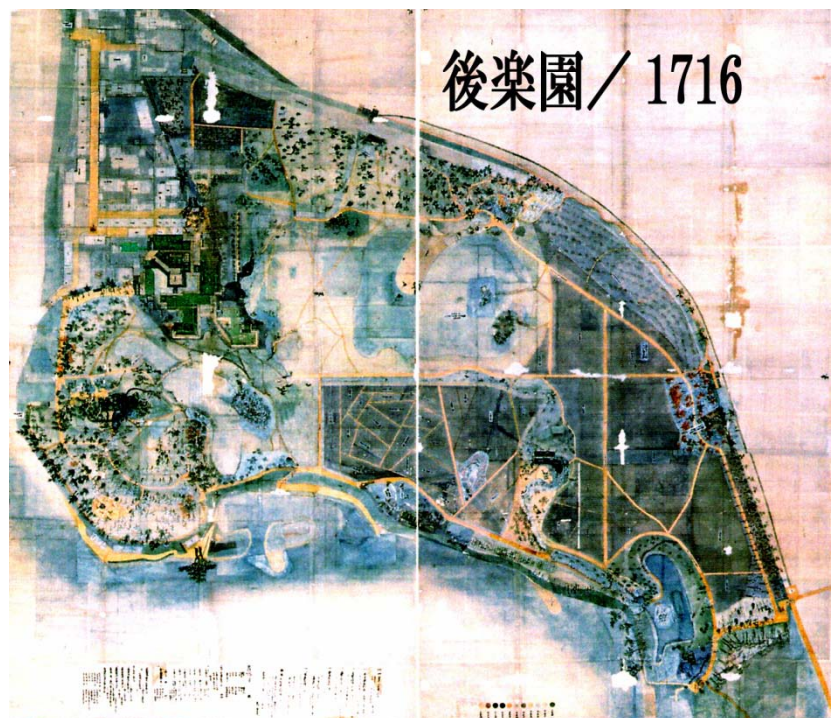
また綱政は、光政の備前東部籠城戦略を捨て、有事には岡山平野で守ることにして岡山城の防衛力の強化を図った。その主眼は旭川の東岸部の強化であった。主な施策としては、

- 武家屋敷を旭川の東に移し、操山麓に多くの寺院を移す。これは岡山城は操山と一体にならなければ守れないと考えた結果である。
- 「後樂園」の築庭。これについては昔から岡山城を敵の大砲の射程外に置くためと伝えられているように、岡山城の北側の備えを厚くする狙いがあったと考えられる。
- 七日市に「御船入」を整備。これは瀬戸内海交通に関して主導権を確保する上で必須のものである。

二 光政の遺志を継いだ永

忠

一六八二年光政卒去後の綱政の戦略転換は明らかであったが、永忠は光政の遺言に基づくものと思われる備前東部籠城戦略に関する種々の造築をその後も継続している。綱政もそれらに関する藩費の支出は認めていた。それらを以下に列挙する。



①下井田の造成

光政卒去後に着手され一六八八年に完成した下井田については既に述べたとおりである。

② 閑谷学校の堅固化

閑谷学校の現講堂、学校を囲む石塀、校門前の 泮池(んち)、二本荒手の池などのすべての施設が完成したのは一七〇一年のことである。なお泮池というのは校門の南にある東西約百^間、幅約七^間という長大な一文字の池で、誰が見ても儒黌(じゅこう＝儒学の学校)の装飾的施設というより城郭の水濠と認められるものである。

一七〇七年永忠が亡くなり、その翌年岡山藩は、「(閑谷学校は) 規模すこぶる宏大なるをもって幕府の忌諱に触れ、その指目する所となりしを以ってなり」という理由で、講堂、大成殿、芳烈祠以外の建物のすべてを取り壊し、廃校とすることを命じた。それに対して学校奉行市浦毅斎が学校存続を訴える熱誠の一巻を綱政に呈して綱政を感動させ、その結果廃校の命令は撤回された。(備前市歴史民族資料館の資料による)

③奴久谷村の経営

今も永忠とその一族の墓地のある奴久谷(ぬくだに＝山陽本線吉永駅の西約二^里)は、一七〇四年永忠が閑谷への隠居を許された際に与えられた新知二百石(＝十数町歩)と思われる。永忠はそこに別荘(べっしょ＝下屋敷)を構え、その屋敷から約一^里北の山腹に^〆滝を造って楽しんだ。

この奴久谷地区は、三石から和氣に至る金剛川に沿う旧山陽道を制する戦略的要点である。すなわち金剛川の南の山塊がこの地点で北に張り出して流れを北に押し出し、また奴久谷の東と西の山稜は北から南に伸びて金剛川に迫っている。この地点は東から攻められても西から攻められても敵を阻止できる要点である。光政の備前東部籠城戦略を継承しようとする永忠は早くからこの村に着目していて、隠退に当たりこの村の加増を綱政に申し出て叶えられたものと思われる。

就実大学元学長の柴田一氏はその著「岡山藩郡代・津田永忠」の中で

「永忠は、池田家の「家臣」の側面と、光政の「私臣」の側面を併せもった人物であった。(中略) 閑谷学問所・和意谷墓所・社倉米・井田・手習所などに関する仕事は、光政の「私臣」としての仕事であった。かれは池田家の「家臣」としてよりも、光政の「私臣」であることに誇りと生き甲斐を持つ男であった。」

と書いている。私もこの「私臣」という言葉を「光政の防衛戦略に関する意志(遺志)の遂行者」に置き換えればまったく同感である。永忠は、一七〇七年二月、岡山城下西中山下の息子の屋敷で波乱に富んだ六十



七年の生涯を閉じ、遺骸は閑谷の自宅を経て奴久谷の墓地に葬られたが、最期まで光政の遺志を追求していたものと信じている。

おわりに

① 光政は将軍に対し純忠の大名であったか

岡山藩の法令集卷之七「第三十六」諸臣教令（八九〇）に年号不詳、光政公被仰出覚として

「上様（将軍）は日本国中の人民を天より預かっている。国主は一国の人民を上様より預かり奉る。家老と士（さむらい）とはその主君を助けて、その民を安くせんことを図らねばならない。一国の民の安らぎと不安とは、国主にかかることではあるが、天下の民の一人でもその平安を得られなければ、上様御一人の責任となる。この国民を困窮させることは上様のご威光を減らし奉る義なり。不忠なることこれより甚だしきはなし。上に不忠、民に不仁、国主の罪は死をもってつぐなえるものではない」（意訳）に始まる約二千字の覚書が掲げられている。この一章をもってわが国の近世政治史の研究者は、池田光政を「将軍に対して忠臣、民に対して仁君」の典型として賞賛しているが、この家臣への訓示の背景を考察すると、この一章がそれほど単純なものではなく、光政が徳川幕藩体制の中で生き延びるためのあがきの一つであったことが分かる。

光政が蕃山を岡山に招き心学を講じさせ、それに諸国から士や浪人が集まったことを幕閣が忌み嫌っていたこと、三代将軍家光の没後（一六五一）由井正雪の乱が起こり、その翌年別木一派の陰謀が露見した際、在府中の光政の嗣子綱政と光政の実弟池田恒元が幕閣に呼びつけられて別木一派と岡山藩との関連について尋問を受けたことについては第二章第一節で触れたところである。翌一六五三年光政は江戸に上ったが、幕閣の光政に対する態度が妻の叔父に当たる三代将軍家光の在世中に比べて相当冷え込んでいることを体感していた。

以下「池田光政日記」の関係箇所を意識する。翌一六五四年七月十九日光政一行は江戸を経ったが、その際老中酒井忠勝より京都所司代板倉重宗宛の書簡を託されていた。七月二十六日三河岡崎の宿で備前の大洪水を知った。八月二日京都に着いて所司代板倉重宗に会い、酒井忠勝の書簡を渡した。それには「光政が上京して貴殿と対面あらば、同人の心学きつとご意見あるべし。もし光政自身はやめられずとも、家中に広まらぬようにありたし」と書かれていた。重宗はそれを光政に示し、「心学が如何ほどよきことにても、かくある上はご用捨しかるべし」と忠告した。光政はそれを聞いて「この度のような書簡を送らるる条、由来あることに候。私が江戸を立つ前酒井忠勝と懇談した際に話が心学に及んだ。それがこの書状の委託になったのであろう」と話したところ、重宗は「この件に違背すればいかなることになるかは測り難く候えば、お心を付けられよ」と重ねて忠告した。八月五日備前に帰着。八月八日家老らに洪水の当面の対策を指示した。

そして八月十一日城内に老中・組頭・物頭残らず召し上げて直ちに申し聞かせたのが冒頭の「上様は日本国中の人民を天より預けられている」に始まる約二千字の訓示であった。そしてその覚書を直ちに幕府に報告したに違いない。京都所司代邸での冷汗を拭い直ちに手を打ったのがこの訓示とそれの幕府への報告であった。そしてこの後、義母の天樹院（千姫）を通じて幕府に洪水復興・飢饉対策として六万両（現在の約六十億円）の借金を申し出て幕府に抱きつく戦術を取ったのである。このような背景を無視して前記の一章から「池田光政＝将軍への忠臣、民への仁君」と決めてしまえるほど世の中は単純ではない。この項については早稲田大学の「岡山藩研究会」を主宰しておられた深谷克己名誉教授の「明君創造と藩屏国家」を参考にした。

武家社会というのは殺し合いにより相手の領地を奪うことで膨張していった。しかし元和偃武以来の平和は武士を奢侈に流し、幕府に対する譜代・旗本からの加増の要求は年毎に高まった。それに対する幕府の手っ取り早い対策は外様の大藩を潰すことであった。その標的とされたのが広島・福島の福島家であり、熊本の加藤家であった。幕府の次なる狙いは仙台の伊達家六十二万石の取り潰しと両池田家（鳥取・岡山計六十四万石）の片方を外すことであった。そこで光政は縁戚であることを理由に伊達騒動に介入して伊達家の存続を図る

とともに、自藩の取り潰しを絶対受けぬように細心の注意を払い、その兆候に対しては速やかな対策を講じたのであった。

② 光政は取り潰しに対して必死の抵抗を準備していた

これを本論の冒頭に掲げれば「備前東部籠城戦略―士農一体」は理解が容易であったかと思う。しかしいきなりこれを言えば、徳川三百年を通じて幕府に武力で対抗しようとした例は天草四郎を除いて幕末の薩長両藩までなかったという歴史を知っておられる諸賢にはそう簡単には受容れてもらえないと思い、なるべく実証的に説明しようとして回りくどくなった。

一七〇一年の赤穂浅野藩の取り潰しを題材にした「忠臣蔵」には、藩士が城明け渡しか籠城戦かで対立論争する場があるが、衆人は五万三千石の同家が幕府に対したところで螳螂の斧であり無用の論議と思って来られたことと思う。

しかし三十一万五千石の光政は、もし幕府から岡山藩の取り潰しの宣告を受けてそれが自己の信念に反する幕閣の恣意的なものと思われれば、断固それを拒否して戦うという強固な意志のもと、赤穂城の築城が始まった一六四八年から一六八二年に没するまでの三十五年間、万一の幕府の攻撃を撃破するための諸準備に心血を注ぎ、藩の人力・財力をそれに注ぎ込んだのである。

人は光政を明君と呼ぶ。その理由として民に対して仁に徹し、他国に先んじて士と民の教育改革を進め、大規模な干拓による新田開発を推し進め、徹底した宗教改革を行うなどいろいろ列举されているが、それらはいずれも取り潰しに対する抵抗準備の一環であったのである。必要とあれば徳川とでも戦うという、人の考えないことを考え、その準備を着実に推進していたからこそ江戸時代三百年三百藩の藩主を通じての絶対的なナンバーワン明君であったのである。

本論を既に読まれた諸賢には、ここで備前東部籠城戦略の主眼が取り潰し対策であったことをここで重ねて述べる必要はないと思われるが、以下にそれを推し進めた理由を戯曲の形で述べて本論の末尾としたい。

——慶安元年（一六四八）晩秋、岡山城本丸・表御殿の六畳ほどの奥座敷、小姓など遠ざけて藩主光政と熊沢蕃山（当時三百石、近習）が向き合う。一通りの挨拶を終わって——

蕃山 御主（おしゅう）さまにはこのところお顔が冴えませんが、やはり赤穂城のことですか。

光政 それよ。播磨には国清公（池田輝政）の建てられた姫路城があるではないか。なぜ一国一城令の世に五万石の小藩に城を造らせるのだ。

蕃山 幕府が築城を催促したようすな。

光政 そうに違いない。内匠頭（たくみのかみ・浅野長直）もさぞ驚いたことであろう。ご苦労なことだ。とは言えおれの身になれば全く面白くない。

国清公の世には播磨、備前、淡路、それに因幡を加えれば池田家は九十万石を超え、大御所（徳川家康）から「婿殿よ。西国の外様大名の東上をこの地でしっかり止めてくれよ」ということであったが。いつ頃からか、このおれも外様に入れられてしまったということだ。

蕃山 赤穂城には港を作るようすな。船による加勢を初めから考えているようす。

光政 讃岐の松平が入るといふことか。西国の外様が攻め上って来たとき、このおれでは心もとないと言うのか。はたまたおれが攻め込むとでも思っているのか。

蕃山 殿、江戸の旗本連中は、広島、福島、熊本の加藤の次は仙台の伊達と岡山の池田を外す番だと噂しているようす。

光政 池田は二つ要らない。しかし鳥取は大御所の血が入っており潰せないということか。

——しばらく沈黙——

蕃山 幕府が天樹院（千姫）さまの婿殿をそう簡単に取り潰すとは思えませんが、まことに言いにくいことながら絶対に取り潰しがないとはいい切れません。ここからは絶対の秘密で、私は首を懸けております。私を信用していただけるなら、込み入った話をさせていただきます。

光政 おれは二郎八を師とっており、お互いに生涯隠し立てのない関係が続けようと思っている。聞かせてくれないか。

蕃山 私は今の世で上様（将軍）が日本国中の人民を預かっておられ、その治世が安泰であることをありがたく思っております。しかし上様の権を実際に預かる老中以下のわがまま振りが目に付きます。彼らのわがままが過ぎてこの国の安泰が揺らぐことがあれば誰かが立ち上がってそれをとがめ、天子様にまつりごとを返さなければならないと思っております。今の幕府に抗することは容易なことではありませんが、正義のためになさねばならぬ時があります。しかしそれは誰にでもできることではありません。今の世にそれができる方が唯一人おられます。それは御主さま、あなたこそと思っております。

光政 正義のため、特に連綿と続いてきたわが国の歴史・文化を次の世に引き継ぐため、私は命を惜しむものではないが、この備前三十一万石で幕府に抗することができようか。

蕃山 それは不可能ではありません。当家のご先祖の大楠公（楠正成）は、千余騎でもって十万とも二十万（太平記では百万）とも言われる鎌倉方を退けておられます。——以下、地形を利用して守る、攻め手が寄せる前に十分な準備をしておく、士（さむらい）だけで守れるものではない、加勢する大名は十分得られる、など第一章第二節の「備前東部籠城戦略—土農一体」の骨子を説明した。——

蕃山 そしてもしこれを行うとして一番大事なことはその準備をしっかり整えることで、それが成否の鍵となります。十年、二十年という準備の時間をかければ勝算は十分あります。日本の国のためにその準備をしておくことが殿の務めと言えましょう。御主さまにはその決心をしていただかねばなりません。なおお求めがあれば、後日絵図面を持ってご説明にあがります。

光政 今まで幕府に対していろいろ思い悩んでいたが、今の話を聞いてすっかりつかえが下りた。領国を守るため最善の努力をしておくことは、それが明清の来寇に対しても、西国外様の東上に対しても必要であり、藩主の務めそのものであるぞよ。後日、細部の話をぜひ聞きたいものだ。

ところで、二郎八は軍学を学んだとは聞いていないが、誰に学んだのか。

蕃山 誰に学んだということはありません。ただ源義経の戦さ振りと大楠公の戦さ振りについて少々調べました。お陰様で軍学者と呼ばれている山鹿素行などには負けたいと思っております。

光政 さすがだな。これからも総ての面でおれを助けて欲しい。今日はいろいろとありがとう。なお今日のことは二人だけの秘密。絶対に他言無用だぞ。

蕃山 そのほうはお安心下さい。

——幕——

③ 真実は那边に・ご自身で考えていただくために

これまで和意谷墓所、閑谷学校、井田及び倉安川について、それぞれ隠された狙いがあるのではないかと考えた人は多いらしい。しかしこれらに関して勇敢に一説を唱えられた方は就実大学元学長柴田一氏お一人で、他の人々は古文書に書き残されていないことについては発言しないという主義を通しておられる。

ここで名もない小生が一説を唱えてもなかなか受容れられないと思うが、目に見えない地動説や太平洋プレート移動などとは違い、和意谷墓所などさほど遠からぬところにおおむね当時の姿を留めているので、それぞれをご自身で尋ねていただき、それぞれの意義を考えていただきたいと思います。その結果、私の説を肯定されるも否定されるも結構である。その実見のポイントを列挙して本論の締めくくりとしたい。

- 一、 和意谷墓所の「七のお山」まで歩き、往時そこまで車力道が築造されていたことを確かめる。
- 二、 閑谷学校の「いちたに池」と「中田池」の二本荒手を見、有事の氾濫用水路の頑丈さを確認する。
（残念ながら「中田池」の氾濫用の水路は平成二十三年度の同池大改修で姿を消した）
- 三、 井田については湿田の「上井田」、乾田の「下井田」、そして下井田の南の区画の中の水抜き用の溝を見て井田の狙いを考える。
- 四、 倉安川については、全長二十 畧の全般と大規模にして堅牢な「吉井閘門」を見て、これが半年で

できたものでないと思われたならば、岡山藩が幕府になぜ偽りの報告をしたかを考えていただきたい。

以上